鹿児島県総合教育センター
平成25年度長期研修研究報告書

研究主題

「国語総合」における古典(古文)を主体的に読む能力を育成する学習指導の在り方

―文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用する言語活動を通して―

鹿児島県立鹿屋高等学校
教 諭 前 田 寛 明

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　研究の構想
　1　研究のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　3　研究の計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ　研究の実際
　1　研究主題に関する基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　(1)　古典(古文)を主体的に読む能力の育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　(2)　文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用・・・・・・・・・4
　(3)　言語活動の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　2　古典(古文)の学習に関する実態調査
　(1)　実態調査の分析と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　(2)　調査結果から設定した研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

　3　単元構想
　(1)　年間指導計画の作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　(2)　単元を構想する手順と指導計画のモデル・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　(3)　学習の手引き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

　4　検証授業Ⅰの実施と考察
　(1)　検証授業Ⅰを構想する手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
　(2)　検証授業Ⅰの実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　(3)　検証授業Ⅰの成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

　5　検証授業Ⅱの実施と考察
　(1)　検証授業Ⅱを構想する手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　(2)　検証授業Ⅱの実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　(3)　検証授業Ⅱの成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

　6　検証授業Ⅰ及びⅡにおける成果と課題
　(1)　検証授業Ⅰ及びⅡにおける成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　(2)　検証授業Ⅰ及びⅡにおける課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

Ⅳ　研究のまとめ
　1　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　2　研究の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

※　引用文献・参考文献

Ⅰ　研究主題設定の理由

高等学校学習指導要領が今年度入学生から年次進行で実施された。今回の改訂の基本的な考え方として,「基礎的・基本的な知識・技能」,「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」,「主体的に学習に取り組む態度」の学力の３要素の育成が示されている。また，国語科においては，従前の「話すこと・聞くこと」,「書くこと」及び「読むこと」から成る領域構成は維持しつつ，基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決できる力を身に付けるよう，言語活動例が具体的に示されている。さらに,〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられ，小学校，中学校及び高等学校を通じて，我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成が重視されている。これらのことから，共通必履修科目である「国語総合」の古典(古文)の授業においては，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を習得，活用して課題を解決する言語活動を通して，自ら思考，判断，表現する力や「生涯にわたって古典に親しむ態度」を育成する指導が求められていると考える。

本校では，学習した文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の定着度が低く，古典(古文)に対する苦手意識をもっている生徒や，ある程度知識・技能が定着していてもそれを活用できず，学習目標に届かない生徒が見られる。そのような生徒の多くは学習意欲を失い，古典嫌いになる者もいる。これまでの実践を振り返ると，文語のきまりの指導は暗記に偏ることが多く，知識・技能の活用といっても現代語訳の完成にとどまることがほとんどで，思考，判断，表現させる言語活動を伴わない，講義解説形式の授業が多かった。このような状況では，生徒を古典嫌いにしたり,「古典は受験のためだけの勉強」と思わせたりするばかりで，古典に親しませることができていなかったと考える。これからは，古典(古文)を主体的に読む能力を身に付けさせ，古典(古文)の学習を通して思考，判断，表現する力を身に付けさせたい。そのような力を身に付けた生徒は，今後様様な古典(古文)の文章を読むことになっても，確かな読みの力を発揮し，高校卒業後も古典に親しんでいくと考える。そのためには，習得した文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用して学習課題を解決する言語活動を通して，古典(古文)を主体的に読む経験を積ませることが大切である。それによって，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の習得に対する必要感も生じ，意欲的に学習に取り組めると考える。

以上の考えから,「国語総合」の古典(古文)において，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用して単元の課題を解決する言語活動を取り入れた学習指導の在り方を明らかにすれば，生徒の古典(古文)を主体的に読む能力を育成することができると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の構想

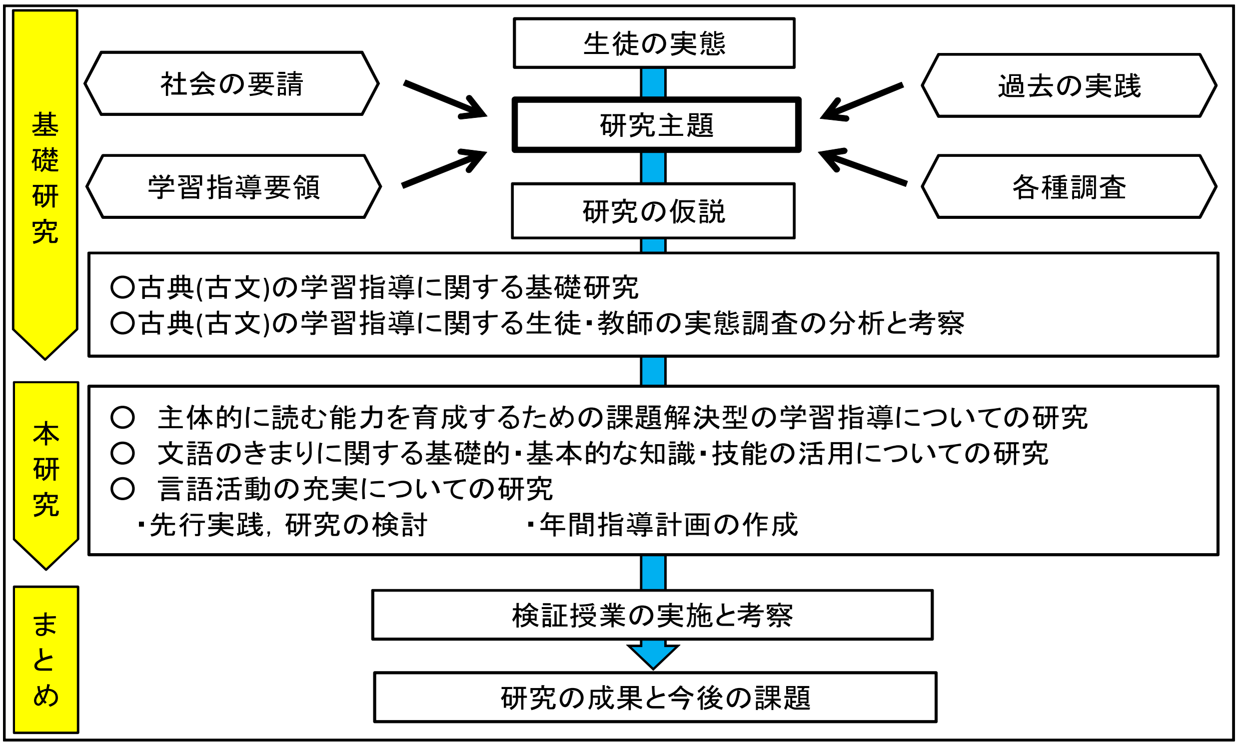
１　研究のねらい

ア　学習指導要領等を基に「国語総合」における古典(古文)の学習指導の在り方を明らかにする。
イ　生徒と教師を対象とした実態調査から,古典(古文)の学習指導における課題を明らかにする。
ウ　古典(古文)を主体的に読ませる指導において，効果的な言語活動の在り方を明らかにする。
エ　文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を読みの視点に沿って活用し，古典(古文)を主体的に読ませるための年間指導計画を作成する。

２　研究の仮説

「国語総合」において，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を読みの視点に沿って活用し，単元の課題を解決する言語活動を取り入れた古典(古文)の学習指導の在り方を明らかにして実践するならば，古典(古文)を主体的に読む能力を育成することができるのではないか。

3　研究の計画



Ⅲ　研究の実際

1　研究主題に関する基本的な考え方

学校教育法第30条第２項では，「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう，基礎的な知識及び技能を習得させるとともに，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくみ，主体的に学習に取り組む態度を養うことに，特に意を用いなければならない」と示されている。このことは，今回の学習指導要領改訂の中核として，総則にも示されている。古典(古文)の学習への主体的な取組を目指すためには，古典(古文)の学習指導が「読むこと」の領域であるので，まず，「古典(古文)を主体的に読む能力の育成」の在り方について明らかにしたい。次に，古典(古文)を読んで課題を解決するために必要となる，「文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用」の在り方について明らかにしたい。さらに，上記のような能力や態度を養うために重要となる「言語活動の充実」について，「読むこと」の学習指導における工夫の在り方を明らかにしたい。

(1)　古典(古文)を主体的に読む能力の育成

ア　主体的に読む

本研究において「主体的に読む」ということは，「他者」と関わり，理解する過程を経て，文章から自分にとっての意味や価値を見いだすことであると考えた。ここで「他者」とは，作品の世界と他の学習者の両者を指す。作品の世界を他者として捉えるという考え方については，田近[*1)](2013)が「読者は，〈読み〉を通して世界を創出し，世界と出会う。読者にとっては，その世界が他者である。」と述べていることを参考にした。田近は，文章を読んで論理を受け止めたり，イメージを思い描いたりすることによって成り立つ「他者理解」を読みの本質と捉えた上で，「読みは，作品世界の傍観者的な観察・分析ではなく，まずは，表現を手がかりに自分のうちに論理やイメージを生み出し，そこに自分にとっての意味や価値を

*1) 田近洵一　著『創造の〈読み〉新論　―文学の〈読み〉の再生を求めて―』2013　東洋館

発見していくという行動であって，その点で主体的なのである。」と述べている。これまでの実践では，生徒の中には教材文を読んでいても，自分とは関係のない世界の話として読んでいる者もみられた。それは，学習指導において作品の世界に対する「自分にとっての意味や価値」を考えさせる過程が不足していたからだと考える。作品の世界という他者と関わり，自分のこととして考える過程については，田近が次のように述べている。

> 世界＝他者は，主体によってとらえられたものとして読者の前に現象する。すなわち，主体にとって他者は，コンテクストを異にした存在，自分とは異質な世界として立ち現れるのだ。そして主体の存在のしかたを相対化する。時には，マンネリ化した思考をよびさまし，隠蔽された感情や欲望をあばき出して，主体の存在のしかたを明らかにする。
> （p. 63）

作品を読み，論理やイメージを読み取って自分とは異質な他者を理解しようとすることで，作者や筆者と関わり，作中人物と関わり，理解することにつながる。このことが，自己を相対化し，自分という存在を明確にすることにもつながる。ここに至って，作品の世界という他者から自分にとっての意味や価値を考えることができると考える。

以上のことから，「主体的に読む能力」とは，表現に即して的確に文章に描かれた論理やイメージを読み取ることができる力と，問題意識を手がかりに，作品の自分にとっての意味や価値を見いだすことができる力のことだと考えられる。

一方，他の読者を他者として捉えることについては，これまでの実践においても学習者同士で読みの交流を行わせるなど，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにするために他者のものの見方，感じ方，考え方に触れる機会を設けるようにしてきた。田近も教室における読みの交流については次のように述べている。

> 教室は，様々なものの見方や考え方・感じ方がぶつかる場であり，様々な〈読み〉の交流の場である。一人で読んでいただけでは特に気にならないことも，ほかとの関係で急に大きな問題に見えてきたり，それだけ見たらごく平凡なことのように見えることが，全体の中で急に大きな発見のようにかがやいてきたりするのも，そこが交流の場だからである。そのような場における他者の〈読み〉との出会いは，その読者である他者，及びその読者によって発見された作中人物としての他者に対する，二重の意味での新たな他者理解の契機となる。こうして読者は，〈読み〉を通して，特に教室での〈読み〉を通して，幅広い他者理解を行為する。（p. 107）

他の読者も同じように主体として作品の世界という他者と関わり，理解し，自分にとっての意味や価値を見いだしている。その内容を交流して「幅広い他者理解」を行うことこそが，教室という場で文章を読む意義であると考える。主体的に読む能力を育成する学習指導において，他の学習者と読みを交流する過程は欠かせないと考える。

以上のことから，本研究において「主体的に読む」ということは，表現に即して論理を受け止めたりイメージを描いたりして作品世界＝他者を理解した上で，他の学習者と読みを交流することによって，作品世界＝他者に別の側面があり得ることや，他の学習者＝他者が作品世界の別の側面を生み出すことを理解するということであると考える。そして，「主体的に読む能力」の育成は，このような過程において自分のものの見方，感じ方，考え方と照らし合わせて作品世界＝他者の意味や価値を考えさせることによって可能になると考える。

イ　古典を主体的に読む

学習指導要領の改訂により，小・中・高等学校を通じて〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられ，系統的な指導が求められている。「伝統的な言語文化」とは，「我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能など」のことであり，このうち「言語芸術」が古典である。世羅[*2)](2010)は，「伝統的な言語文化」を学ぶ意義について，次のように述べている。

> 「伝統的な言語文化」を学ぶ意義は，現代的立場から「伝統的な言語文化」の意義を安易に問うのではなく，その「伝統的な言語文化」が創造された時代の側に立って，それを受容・享受し，過去の側から現代を相対化し，現代を生きる自らの中に歴史性を発見するとともに，新しい文化を創造していく際の基礎的な能力と態度を養うところにある。
>
> (p.157)

「なぜ古典を学ぶのか」という疑問は多くの生徒が抱いていると考える。その答えが，「受験に必要だから」だけにとどまるのではなく，「異なる時代の人間の在り方を知り，そこから現代を生きる自己を相対化することで，新たな創造に生かすことができるから」といったものにまで思い至らせたい。古典が創造された時代の側に立ち，時代を超えて古人(他者)の文脈を受け取って理解し，その視座から現代を生きる自己を相対化するという行為は，前述の「主体的に読む」ということそのものである。古典を授業で読む際に，文法の暗記と現代語訳の完成のみにとどまることなく，現代の自分にとっての意味や価値を考えさせる過程を含めることで，主体的な読みに到達させたい。例えば，『竹取物語』を教材として，かぐや姫が地上の人々と別れる場面を読み，不老不死の天人にとって「きたなき所」であるはずの地上で出会った翁たちとの別れを悲しむかぐや姫の様子から，「親子の愛情」や「幸せ」などをテーマとした学習課題について考えさせる学習指導の在り方が考えられる。当時の人々の思想を踏まえて考えさせることで，現代の自分のものの見方，感じ方，考え方について見つめ直させたい。なお，本研究では，「国語総合」の古典で扱う教材のうち古文に限定して，その学習指導の在り方について明らかにすることとする。

以上のことから，本研究において，「古典(古文)を主体的に読む」とは，異なる時代の視点から現代を生きる自己を相対化し，自分にとっての意味や価値を発見するという目的意識をもち，他の学習者と交流しながら課題解決的に読むことだと考える。そして，「古典(古文)を主体的に読む能力の育成」は，課題解決を通して古典(古文)作品の意味や価値を発見し，現代を生きる自分のものの見方，感じ方，考え方を見つめ直すという経験によって可能になると考える。古典(古文)の授業において，古文を読み，単元の学習課題を自分の課題として解決することを通じて，古人の心情等について考えさせたり，他の学習者との交流を通して相互に新たな考えをもたせたりして,認識を深める学習指導の在り方を明らかにしたい。

(2)　文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用

古典(古文)に関する知識には，「言語文化の特質」，「文語のきまり」，「言葉の成り立ち」などがある。本研究では，特に文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能について，読

---

*2)日本国語教育学会　編『豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造　Ⅰ理論編』　2010　東洋館

みの視点に沿って活用して読み深める指導の在り方について明らかにしたい。

文語のきまりとは，現代語と異なる古文特有のきまりであり，具体的には，仮名遣いや活用の違い，主な助詞・助動詞などの意味・用法，係り結び，敬語の用法の大体などが挙げられる。文語のきまりの指導は，学習指導要領において「読むことの指導に即して行う」と示されている。しかし，これまでの実践では，暗記に偏り，現代語訳のみにとどまる授業が多く，生徒の興味・関心を広げたり，生徒が古典に親しんだりすることには至らない指導に陥りがちであった。これからは，文中の行動や心情，情景等の描写に着目させて読みの視点をもたせ，その部分に用いられる文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用することで，古典に描かれた世界のイメージを明確化し，古人のものの見方，感じ方，考え方に迫り，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする学習指導の在り方を明らかにしたい。習得した知識・技能が活用されることによって，知識・技能の定着とともに，習得に対する学習意欲の向上も期待できると考えられる。

このことは，古典(古文)を現代語訳ではなく原文で読むことの意義とも関わると考える。例えば，現代語で過去や完了を表す助動詞は「～た」だけであるが，古文では「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」の六つがある。右の例は『竹取物語』でかぐや姫が自身を月の都の人間であると明かす場面である。「打ち明けようと思っていたが，言えば必ず翁たちの心を惑わしてしまうからと思い，今まで言わずに過ごしてきた」という意図的な行為には「しか(「き」の已然形)」「つる(「つ」の連体形)」が用いられ，「言わないままではいられないから打ち明ける」「前世からの宿命でこの世界にやってきた」という不本意な行為や意図的でない行為には，「ける(「けり」の連体形)」「ぬる(「ぬ」の連体形)」が用いられている。人物の心情が助動詞の違いにも表れているのである。このように，原文には現代語訳にはない表現の豊かさがあり，そのような古典(古文)を，心情描写，行動描写等の読みの視点に沿って文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用させて読ませたいと考える。

> かぐや姫泣く泣く言ふ、「先々も申さむと思ひ**しか**ども、必ず心惑はしたまはむものぞと思ひて、今まで過ごしはべり**つる**なり。さのみやはとて、うち出ではべり**ぬる**ぞ。おのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。それを、昔の契りあり**ける**によりなむ、この世界にはまうで来たり**ける**。」

以上のように，暗記に偏った学習指導から活用して考えさせる学習指導へと転換することによって，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を，文章を解釈したり，自ら考え，深く読み味わったりするために活用するものとして指導することができれば，生徒の学習意欲を喚起し，古典(古文)を主体的に読む能力を育成することができるようになると考える。

(3)　言語活動の充実

学習指導要領において，「国語総合」の「読むこと」の指導における言語活動例としては，次の四つが示されている。

> ア　文章を読んで脚本にしたり，古典を現代の物語に書き換えたりすること。
> イ　文字，音声，画像などのメディアによって表現された情報を，課題に応じて読み取り，取捨選択してまとめること。
> ウ　現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し，自分の考えをもって話し合うこと。
> エ　様々な文章を読み比べ，内容や表現の仕方について，感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。

これらの活動には，読む活動だけではなく，話し合う活動や書く活動が含まれている。古典(古文)の学習指導は「読むこと」の領域であるが，読む活動だけでは，指導者が文章の内容に

ついて一方的に説明し，生徒は思考，判断，表現することなく，説明されたことや現代語訳などを知識として覚えるだけで，現代語訳することだけが目標の指導になってしまうことがある。ただ読む活動だけの学習指導では読む能力を十分に育成することはできないということを認識し，話す活動，聞く活動，話し合う活動，書く活動を，「読むこと」の単元の中に位置付けることで，学習効果を高める必要があると考える。本研究では，単元の中に有機的に位置付けられるように，共通するテーマをもつ複数教材を読み比べる活動を中心に，読み取ったことについて他の生徒と話し合う活動や，話合いによって広げたり深めたりした考えをまとめて文章を書く活動を展開する単元を構想したい。

単元を構成する学習について，吉田(2010)[*3)]は，「読むこと」の授業の多くが「初めに教科書(教材)ありきの授業」になりがちであると指摘した上で，「単元学習は，学習者から，学習者の実態から，学習者の学力の実態からスタートする」ものであり，「目標→内容→方法→評価」の順序で企画されるべきものであると述べている。これまでの実践はまさに吉田の指摘する「教科書(教材)から出発する授業」であった。学習者の実態を把握し，そこから見いだされた単元の目標を実現するための指導計画を作成し，効果的な指導方法として言語活動を単元の中に有機的に位置付ける工夫をしたい。

また，古典の指導における単元の構想については，同書において世羅が次のように述べている。

> 「学習者が主体的に古典に働きかけ，古典との豊かな対話を図る指導」を実現するためには，〈学習テーマ〉を軸とした古典単元学習を実践するのが最適の方法であると考える。学習者の興味・関心や問題意識をふまえた〈学習テーマ〉を設定して，〈学習テーマ〉を軸とした古典の教材編成を行い，学習者が〈学習テーマ〉の解決をめざして，主体的に読む・書く・話す・聞く言語活動を展開していく過程で，読む・書く・話す・聞く言語能力を総合的に育てるという古典単元学習が，今後，小・中・高等学校で広く実践されることが求められる。 (p. 164)

主体的な読みの能力の育成のために，生徒に課題解決という目的をもたせ，共通するテーマをもつ複数の文章を読み比べる活動によってそれぞれの文章の共通点や相違点を踏まえてより深く考えさせ，そこで読み取ったことを話し合う活動によって他者理解の契機を経験させる。そして，まとめの文章を書く活動によって現代を生きる自分にとっての意味や価値を考えさせる。このようにして単元の中に各活動を位置付けることで，より効果的に内容を読み取り，読みを深め，読む能力を育成することができるとともに，生徒の主体的に学ぶ能力の育成も可能になると考える。

単元の学習過程の各段階における様々な活動を一貫した目的意識で学習させ，学習効果を高めることができるように，言語活動を充実させた学習指導の在り方を明らかにしたい。

2　古典(古文)の学習に関する実態調査

(1)　実態調査の分析と考察

(調査実施　平成25年６月　対象　県立鹿屋高等学校　第１学年　270人)

62.9％の生徒が「古文の勉強は大切だ」と肯定的に回答したが，「古文の勉強は入試に関係

*3) 日本国語教育学会　編『豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造　Ⅰ理論編』　2010　東洋館

なくても大切だ」と肯定的に回答した生徒は37％であった。また，「古文を勉強すれば今の自分に役立つ」「古文を勉強すれば将来の自分に役立つ」と肯定的に回答した生徒は20～30％程度にとどまった（**図１**）。このことから，多くの生徒が古文の学習に対して「大学入試のためだけに勉強するもの」という意識をもっていると考えられる。古典（古文）の学習を通じて，生涯にわたって必要となる思考力，判断力，表現力等の高まりを実感させることで，多くの生徒が「古文の勉強は入試と関係なくても大切だ」と考えるような学習指導の在り方を明らかにしたい。

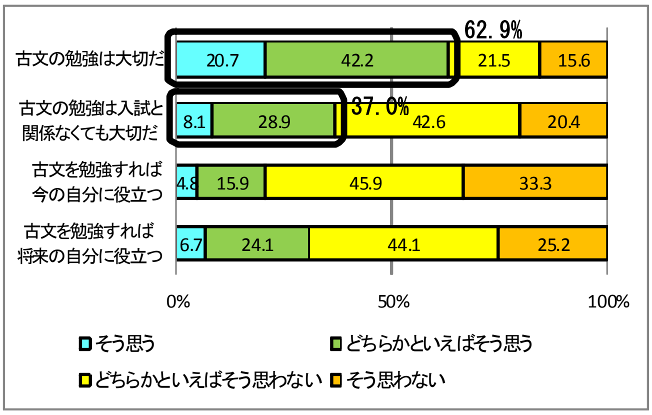


図１　古典（古文）の学習に対する意識

授業中に行われる活動の中で，知識・技能を活用する活動に対しては，多くの生徒が「よく行われる」「古文を読む力が高まると思う」と回答したが，「好きだ」という回答は少なかった（**図２**）。このことは，現状において文語のきまりに関する知識・技能を活用するということが現代語訳を完成させることのみに終始しており，多くの生徒が好きではないと感じているということを表していると考えられる。現代語訳するだけでは解決できない学習課題について文語のきまりに関する知識・技能を活用して解決し，古典に描かれた世界や人物についてより深く理解できるような活動を行う必要がある。例えば，「係り結びの法則」により強調されているものやことに着目させ，作者の意図を考えさせる活動などが考えられる。このような活動を行うことによって，課題解決のために文語のきまりが必要であるという実感をもたせるとともに，古典に描かれた世界をより深く理解させることが可能になると期待できる。

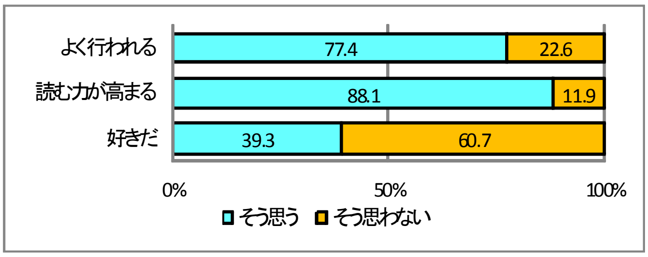


図２　知識・技能の活用に対する意識

授業中の活動としては，これ以外にも，「グループで話し合う活動」「まとめの文章を書く活動」「別の文章と読み比べる活動」の項目を設けて調査した。各活動とも「よく行われる」への肯定的回答は少なく，これらの活動が実践されていないことが分かった。ところが，各活動とも「読む力が高まる」への肯定的回答は多かった（**図３**）。このことは，生徒が多様な言語活動の学習効果に期待しているということを表していると考えられる。この点を重視して，それぞれの活動が有機的に働くように単元の学習過程の各段階に位置付け，単元全体を通じて思考力，判断力，表現力を身に付けさせる指導を行うことで，学習効果を高めることができると考える。

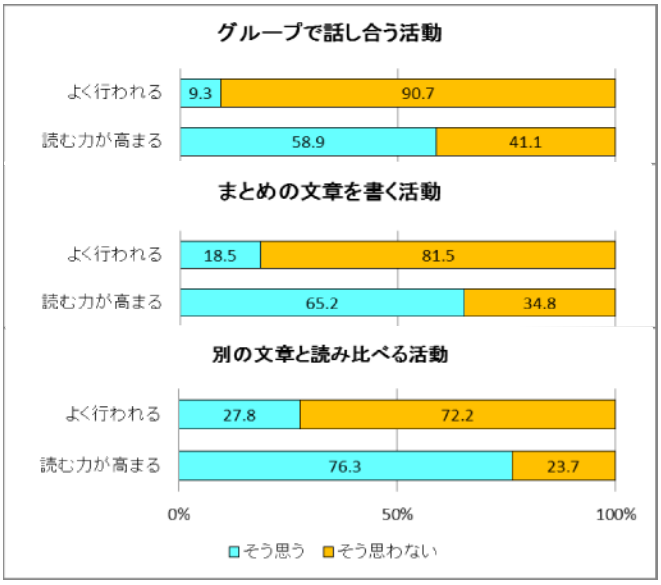


図３　言語活動に対する意識

(2)　調査結果から設定した研究の視点

実態調査の分析と考察から，研究の視点を次の三つに集約した。

視点１　古典(古文)を主体的に読む能力の育成を目指す，課題解決型の学習指導の在り方
視点２　習得した文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習指導の在り方
視点３　古典(古文)を教材として読む能力の育成を図る言語活動の充実の在り方

視点１では，知識・理解に偏り，現代語訳を目的とするような授業で多くの古典嫌いを生んできたというこれまでの実践を反省し，生徒自身が課題解決を通してものの見方，感じ方，考え方が豊かになったことを実感し，古典(古文)を読んで自分にとっての意味や価値を発見できるような学習課題の在り方を明らかにする。

視点２では，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を，現代語訳の完成のためだけに活用するのではなく，「読むこと」の学習を通じてものの見方，感じ方，考え方を豊かにするために，読みの視点に沿って活用する学習指導の在り方を明らかにする。このような指導は,当該単元以前に習得した知識・技能を当該単元で活用することによって定着を図るなど,系統的に指導していくことで学習効果が高まると考えられるため，年間指導計画の作成が必要であると考える。

視点３では，古典(古文)を「読むこと」の教材として指導し，目標を達成するために，読み比べたことについて話し合ったり書いたりする言語活動を展開する単元を構想し，古典(古文)を教材とする「読むこと」の学習指導において言語活動をどのように充実させるかということについて明らかにする。

３　単元構想

(1)　年間指導計画の作成

「国語総合」における古典(古文)を主体的に読む能力を育成する学習指導の在り方を構想するに際し，まず年間指導計画の作成について考える。田中(2003)[*4)]は，年間指導計画作成の基本的な考え方として，次の六つを挙げている。

①　学校の教育目標，学校全体の教育活動，教育課程全体を視野に置いて，言語能力の育成を主たる任務とする国語科としての役割を果たすという立場から，他教科等との関連を図ること
②　科目の目標を基にして単元等の目標等を設定すること
③　生徒の実態等に照らし，学習の段階性，言語能力の系統性を考慮しつつ，単元等を構成すること
④　目標の確実な実現のために，単元等の目標・内容及びそれに準拠した評価規準等はできるだけコンパクトなものにすること
⑤　学習指導要領，特に言語活動例との関連を具体的に図ること
⑥　学校図書館の機能の活用を図ること

①⑥は作成全体に関わる視点と捉え，②～⑤を基に作成手順を考えた。本研究では，単元の目標設定に生徒の実態等も考慮することとして②③を統合し，読み比べる言語活動を展開する単元の構想のために③とは別に教材を吟味する手順を設けた。更に，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習課題を設定する手順を追加した。以上の考えに基づ

*4) 田中孝一　著「国語科教育改善の基本方向(二)新しい国語科教育課程の編成に向けて」『中等教育資料』平成15年２～４月号　ぎょうせい

き,「国語総合」における古典(古文)の年間指導計画作成の手順を次のように考えた。

① 生徒の言語能力の実態を把握し，学習の段階性や系統性を考慮しつつ，科目の目標の実現を目指して学習指導要領の指導事項を配置し，単元の目標を決定する。
② 指導事項及び単元の目標にふさわしい教材を吟味し，単元の内容を決定する。
③ 単元の目標を踏まえ，単元の評価規準を決定する。
④ 教材の特性を踏まえ，学習指導要領の言語活動例を基に，単元の言語活動を決定する。
⑤ 学習課題を設定し，課題解決のために活用する文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を決定する。

①については，研究の視点1を踏まえ,「国語総合」の「読むこと」の指導事項として学習指導要領に示されている次の五つを単元に配置し，それに基づいて単元の目標を決定した。

ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。
イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約や詳述をしたりすること。
ウ 文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み味わうこと。
エ 文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図を捉えたりすること。
オ 幅広く本や文章を読み，情報を得て用いたり，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしたりすること。

本研究では，アは古典作品の「表現の特色」に触れることで，古典(古文)を読む際にも様々な文章の形態に応じて読むことができるように，最初の単元に配置した。イは主に説明的文章を教材とする際の指導事項として位置付けることができると考えたため，和歌の凝縮された表現から内容を的確に読み取って詳述したり，補助教材の評論文を要約したりする単元の指導事項として配置した。ウは主に文学的文章を教材とする際の指導事項として位置付けることができ，本研究で目指す主体的に読む能力の育成とも関連が深いと考えたため，他の指導事項より多く配置した。エは自分の考えの形成をねらいとしており，書き手の意図を捉える随筆教材の指導事項として配置した。オは，ア～エの指導事項についての指導によって育成した読みの力を総合して生徒の「ものの見方，感じ方，考え方を豊かに」することを目指し，年間指導計画の最後に配置することとした。

②については，研究の視点3を踏まえ，教科書教材を中心教材として，共通するテーマをもつ副教材を選定して単元を編成した。本研究では，今年度本校で使用した教科書を基に計画を作成し，副教材については教科書教材と同一作品の中から別の文章を一つ選定することとし，他の教科書に採録されているものを教材化した。

③については,「国語総合」の評価の5観点である「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解」から，古典(古文)の指導においては「関心・意欲・態度」「読む能力」「知識・理解」の3観点として，単元の目標に応じた評価規準を作成した。なお,〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は「知識・理解」で評価する。この段階で設定する評価規準は，指導事項を参考にしつつ,「コンパクトなもの」になるよう留意した。例えば，指導事項のエでは「内容や表現の仕方について評価」することと,「書き手の意図をとらえ」ることとを分け，二つの単元に重点化して配置するなど，各単元の評価規準が複雑にならないように設定した。

④については，研究の視点3を踏まえ，前述の言語活動例ア～エの中から，指導事項との関連性を考慮して配置した。単元の各過程には様々な活動を配置するが，その各過程を貫いて単元全体の目標達成を導く言語活動を設定した。

[5]については，研究の視点２を踏まえ，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能について種類ごとに分け，当該単元において活用するもの（以前の単元で習得したことを前提とする）と，習得するものを配置した。

以上のことに留意して，「国語総合」の古典（古文）の年間指導計画を作成した（**表１**）。

表１　「国語総合」における古典（古文）の年間指導計画

学期	学習指導要領 指導事項	学習指導要領 言語活動例	単元名	単元の目標	教材 教科書	教材 補助	文語のきまり 活用	文語のきまり 習得	評価規準
1	ア	ア	古文の響きを味わう	表現の特色に注意して文章を読んでいる。	『宇治拾遺物語』 絵仏師良秀		i	ii iii	歴史的仮名遣いを理解して正しく音読し，あらすじを理解している。
1	ウ	エ	古文の魅力について考える	人物，情景，心情などを表現に即して読み味わっている。	『竹取物語』 かぐや姫のおひたち	かぐや姫の嘆き	i ii iii	iv vi	用言に注目し，物語の展開を理解してものの見方，感じ方，考え方を深めている。
1	ウ	エ	恋愛の在り方について考える	人物，情景，心情などを表現に即して読み味わっている。	『伊勢物語』 筒井筒	あづさ弓	iv vi	v viii	係助詞に注目し，人物の心情を理解してものの見方，感じ方，考え方を深めている。
2	エ	エ	古文の「戒め」を現代に当てはめる	文章の構成や展開を確かめ，書き手の意図を捉えている。	『徒然草』 ある人，弓射ることを習ふに	高名の木登り	iv v vi	v vi	助動詞と助詞に注目し，書き手の意図を捉えている。
2	イ	ア	古典の和歌を現代の言葉で書き換える	内容を叙述に即して的確に読み取り，要約や詳述をしている。	和歌 『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』		iv v vi viii	viii	和歌の修辞に注目して的確に解釈し，現代に当てはめて詳述している。
2	ウ	エ	子を思う親心について考える	文章に描かれた人物，情景，心情を表現に即して読み味わっている。	『土佐日記』 帰京	亡児	iv v vi	v vi vii	和歌の修辞に注目して的確に解釈し，人物の心情理解を深めている。
3	エ	イ	自然と人間を対比して考える	文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方についての評価をしている。	『奥の細道』 平泉	立石寺	iv v vi	v vi	表現に即して情景を理解し，実際の映像と比較して表現の仕方を評価している。
3	オ	ウ	極限状態で他者を思いやる心について考える	文章を読み，情報を得て用いたり，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしたりしている。	『平家物語』 木曽の最期	敦盛最期	iv v vi vii	vii	敬語に注目して人物の行動と心情を的確に解釈し，ものの見方，感じ方，考え方を深めている。

学習指導要領の指導事項	**ア　文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。** **イ　文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約や詳述をしたりすること。** **ウ　文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み味わうこと。** **エ　文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図を捉えたりすること。** **オ　幅広く本や文章を読み，情報を得て用いたり，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしたりすること。**
学習指導要領の言語活動例	ア　文章を読んで脚本にしたり，古典を現代の物語に書き換えたりすること。 イ　文字，音声，画像などのメディアによって表現された情報を，課題に応じて読み取り，取捨選択してまとめること。 ウ　現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し，自分の考えをもって話し合うこと。 エ　様々な文章を読み比べ，内容や表現の仕方について，感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。
文語のきまり	i　歴史的仮名遣い　ii　品詞　iii　活用形の種類と用法　iv　用言　v　助動詞 vi　助詞　vii　敬語　viii　和歌の修辞

年間指導計画における検証授業Ⅰ及びⅡの位置付けを右の**表２**を用いて示す。検証授業Ⅰを行う１学期は，高等学校における古典（古文）学習の入門期と捉え，文法指導よりも学習に対する意欲をもたせることを重視した三つの単元を計画した。検証授業Ⅰでは，その最後の単元として，生徒が興味をもちやすいと考えられる「恋愛」をテーマに，前単元で習得した「用言（ⅳ）」「助詞（ⅵ）」の知識とともに，中学校の既習事項である「係り結びの法則」の知識を活用する課題解決型の授業を計画した。検証授業Ⅱを実施する２学期は，夏休みの補習等で助動詞を取り立てて指導したことによって文法指導が増え，古文に対する学習意欲が落ち込む時期と捉え，学習課題の設定についてより現代の自分との関わりが分かりやすいものとなることを重視した。検証授業Ⅱでは，高校生活に慣れて油断が生じる時期であることから「油断」をテーマとして，前単元までの学習及び夏休みの補習等で習得した「助動詞（ⅴ）」と「助詞（ⅵ）」の知識を活用する課題解決型の授業を計画した。

表２　検証授業Ⅰ及びⅡの位置付け

学期	学習指導要領 指導事項	学習指導要領 言語活動例	単元名	単元の目標	教材 教科書	教材 補助	文語のきまり 活用	文語のきまり 習得	評価規準
1	ア	ア	古文の響きを味わう	表現の特色に注意して読んでいる。	『宇治拾遺物語』 絵仏師良秀		ⅰ	ⅱ ⅲ	歴史的仮名遣いを理解して正しく音読し，あらすじを理解している。
	ウ	エ	古文の魅力について考える	人物，情景，心情などを表現に即して読み味わっている。	『竹取物語』 かぐや姫のおひたち	『竹取物語』 かぐや姫の嘆き	ⅰ ⅱ ⅲ	ⅳ ⅵ	用言に注目し，物語の展開を理解してものの見方，感じ方，考え方を深めている。
	検証授業Ⅰ ウ	エ	恋愛の在り方について考える	人物，情景，心情などを表現に即して読み味わっている。	『伊勢物語』 筒井筒	『伊勢物語』 あづさ弓	ⅳ ⅵ	ⅴ ⅷ	係助詞に注目し，人物の心情を理解してものの見方，感じ方，考え方を深めている。
2	検証授業Ⅱ エ	エ	古文の「戒め」を現代に当てはめる	文章の構成や展開を確かめ，書き手の意図を捉えている。	『徒然草』 ある人，弓射ることを習ふに	『徒然草』 高名の木登り	ⅳ ⅴ ⅵ	ⅴ ⅵ	助動詞と助詞に注目し，書き手の意図を捉えている。

文語のきまり	ⅰ　歴史的仮名遣い　ⅱ　品詞　ⅲ　活用形の種類と用法　ⅳ　用言　ⅴ　助動詞 ⅵ　助詞　ⅶ　敬語　ⅷ　和歌の修辞

(2)　単元を構想する手順と指導計画のモデル

年間指導計画に基づいて単元を構想するに当たっては，鹿児島県総合教育センターが示す「言語活動の具体化の手順」を参考にした。言語活動を具体化する際に考慮すべき「言語活動を具体化する際の要素」として，**図４**の４点が挙げられている。そして，これらの要素を踏まえて，学習目標の達成につながる効果的な言語活動を行うために，**表３**の手順が示されている。このステップ１～６の順序は固定的なものでなく，「ステップの順序を弾力的に捉えて具体化することも考えられる。」としている。

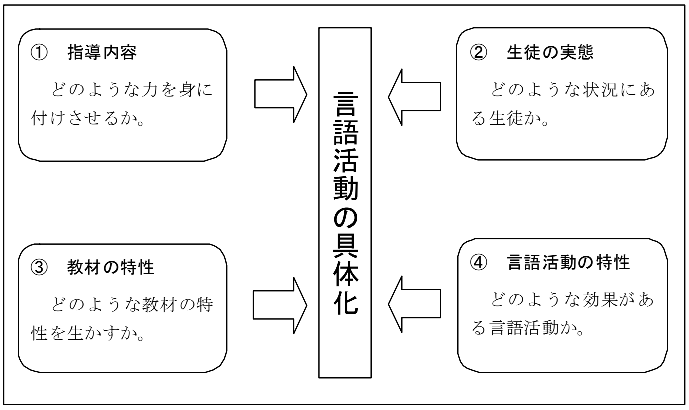


図４　言語活動を具体化する際の要素

表３　言語活動を具体化する手順

ステップ１　単元で指導する指導事項の確認
○　年間指導計画から，単元で指導する指導事項を確認する。 ○　学習指導要領の指導事項と単元の学習のねらいとの関連を明確にし，単元の目標を設定する。
ステップ２　身に付けさせたい力の具体化と重点化
○　指導事項を分析し，具体的にどのような力を身に付けさせる必要があるのか（どのようなことができる，分かるようになればよいのか）を明確にする。 ○　本単元で重点的に指導する内容を決める。
ステップ３　生徒の実態の把握
○　学習に対する関心・意欲・態度について把握する。 ○　身に付いている（いない）言語能力を把握する。 ○　これまで行ってきた言語活動の経験を把握する。

ステップ４　教材の分析と補助教材・資料・教具等の選定
○　教科書教材を中心に学習の目標達成に適切な教材を選定する。 ○　教材文の分析を行い，その特性を把握する。 ○　学習の効果をあげる補助教材・資料・教具等の選定を行う。
ステップ５　効果的な言語活動の設定
○　言語活動例の具体化を図る。生徒の実態に応じて，例示された活動以外の言語活動も工夫する。 ○　どのような言語活動が「身に付けさせたい力」につながるか検討する。
ステップ６　指導計画の作成
○　ステップ５までの内容を基に，単元の指導計画を作成する。 ○　指導計画を基に，１単位時間の学習計画を立てる。 ○　学習に必要なワークシートの作成や発問，板書の計画を立てる。

また，西辻(2013)[*5)]は，作成の過程を含む計画自体を必要最小限にシンプルにすべきとした上で，最低限必要な事項として次の三つを挙げている。

①　当該単元で身に付けさせたい言語能力 ②　身に付けさせたい言語能力を育成するのにふさわしい言語活動 ③　身に付けさせたい言語能力と，それを育成するための言語活動にふさわしい教材

このことを踏まえ，「国語総合」における古典(古文)の単元を構想する手順を**表４**のように作成した。本研究の視点１より，自分にとっての意味や価値を考え，主体的に読む能力を育成するためには，まず生徒の実態把握が必要と考え，ステップ３を最初の手順として配置し，次にステップ１及び２を単元の目標及び評価規準として配置した。続くステップ４を読み比べる活動に合わせて「教材の編成」とし，視点２より各教材の中で活用する文語のきまりを明示するための手順を新たに設けた。視点３よりステップ５の言語活動を最後に配置し，ステップ６の指導計画は別にモデルを作成することにした。

表４　単元を構想する手順及び留意点

手順	留意点
１　生徒の実態把握	生徒の実態を踏まえて，現代の生徒の興味・関心や問題意識に関連した学習課題を設定する。
２　単元の目標設定	年間指導計画を踏まえて，「国語総合」の「Ｃ読むこと」の指導事項を確認して単元の目標を３観点から設定する。
３　単元の評価規準の設定	単元の目標と年間指導計画の評価規準を踏まえ，単元で育成したい力を明確にして，「関心・意欲・態度」，「読む能力」，「知識・理解」の３観点に分けて具体的に作成する。
４　教材の編成	教科書教材を中心として，共通のテーマをもつ補助教材を編成する。
５　文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用	学習課題の解決に必要な文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・理解について具体的に示し，活用の際にどのような読みの視点を与えるかについても示す。
６　効果的な言語活動の設定	年間指導計画で取り上げた言語活動例が当該単元の目標にふさわしいかを確認し，言語活動を設定する。

単元の指導計画のモデルについては，視点１より単元の学習課題の設定とまとめを第１次と第４次に，視点２より文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用を第２次に，視点３より各過程に配置した課題解決のための活動のうち，中心となる読み比べる活動を第３次にそれぞれ配置し，これらの視点が明確になるように意識して，**表５**のように作成した。言語活動の欄には，単元を通じて行う活動と，単元の各過程に配置する活動を併記できるようにした。主な学習活動の欄には，各時の評価規準及び評価の方法も示した。

*5) 西辻正副　著「高等学校国語の指導の改善(43)新学習指導要領を踏まえた指導と評価の具体的な展開③」『中等教育資料』平成25年２月号　学事出版

表５　古典（古文）の単元の指導計画のモデル

次	言語活動	各時の目標	主な学習活動
1	単元を通して学習課題を解決する 話し合う（書く）活動 **視点１**	・　学習課題及びその解決に活用する文語のきまりを理解する。	・　テーマについての意見を話し合う（書く）。 **学習課題を設定する。** ・　課題解決に活用する，既に習得した文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識について確認する。 **評価規準と評価の方法** 知識・理解（記述の確認）
2	読む活動 **視点２**	・　教材１を読み，学習課題について文語のきまりの知識を活用して考える。	・　テーマに基づく教材１を読む。 ・　学習の手引きを用いて，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用して学習課題について考える。 読む能力①（記述の確認）
	読む活動 **視点２**	・　教材２を読み，学習課題について文語のきまりの知識を活用して考える。	・　テーマに基づく教材２を読む。 ・　学習の手引きを用いて，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用して学習課題について考える。 読む能力①（記述の確認）
3	読み比べる活動 話し合う活動 **視点３**	・　二つの文章を読み比べて学習課題について考え，話合いで考えをまとめる。	・　学習の手引きを用いて，二つの文章を読み比べ，学習課題について考える。 ・　学習課題についての自分の意見を話し合い，考えをまとめる。 読む能力②（記述の分析）
4	書く活動 **視点１**	・　単元全体を振り返り，まとめの文章を書く。	・　学習の手引きを用いて，学習課題についての考えを文章にまとめる。**（自分にとっての意味や価値を考える）** ・　単元のまとめをする。 関心・意欲・態度（記述の分析）

(3)　学習の手引き

生徒の思考，判断，表現を促すための工夫として，学習の手引きがある。大西[*6)]（2013）は，「学習の手引き」について，「学習の手引きは，学習者一人ひとりに，確かな学力と学習力とを身に付けさせ，主体的積極的な学習態度を養うという授業の目的のもとに，指導方法の一つとして，学習課題（問題），学習の手順・方法，および手がかりやヒントなどを内容として，ある学習単位について，書きことばによって表現し，提示するものである。」と定義している。本研究では，単元のそれぞれの過程においてこの学習の手引きを作成し，学習課題の解決のために，古典（古文）を表現に即して読ませるとともに，読みの視点をもたせながら読みを広げたり深めたりさせるための問いを設け，提示しようと考えた。

表６　学習の手引きの例

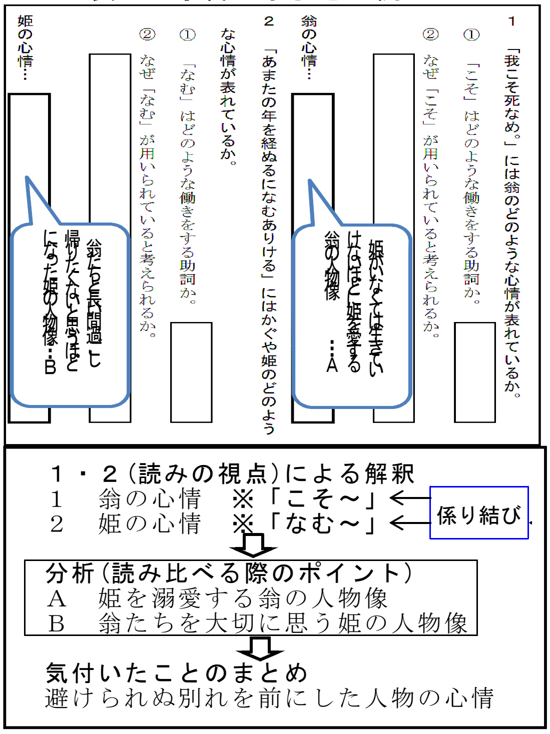


表６は検証授業Ⅰにおいて生徒に示した「学習の手引き」の例である。文章の表現に即して内容

*6) 大西道雄　著『国語科授業づくりの理論と実際』　2013　渓水社

を理解し，学習課題を解決する上で必要な読みの視点を「１・２」の問いで示す。次に，これらの問いを考えるために必要となる文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能について，「①・②」の問いで確認し，段階的に読みを広げたり深めたりする。例の１では，これまでの実践では「係り結びの法則」について「文末の已然形を導く」ということの確認だけで終わりがちであった部分について，読みの視点として提示した「翁の心情を考える」という問いを考えさせた。①で「係り結びの法則」を確認し，ここでは「我」という語が強調されることを理解させる。そして②で，「こそ」が用いられる理由を問うことで，なぜ「我」が強調されるかということを考えさせる。かぐや姫の月に帰るという告白を聞いた翁が，かぐや姫がいなくなった後自分はどうなるだろうかと自らを客観的に捉えた結果，かぐや姫がいない世の中で生きてはいけないと考えたことを理解させる。以上のことから，「我こそ死なめ」には，かぐや姫がいなくては生きていけないほどの翁のかぐや姫に対する愛情や親心といった心情が読み取れることを理解させた。このようにして，１・２で登場人物の心情を解釈させるとともに，補助教材と読み比べる際のポイント(例のＡ・Ｂ)を明確化し，気付いたことをまとめられるような学習の手引きを作成した。この学習の手引きを各時の学習指導において作成し，読みの視点を与えることで，生徒の思考，判断，表現を促したいと考える。

４　検証授業Ⅰの実施と考察

(1)　検証授業Ⅰを構想する手順

12ページの**表４**の手順を踏まえ，検証授業Ⅰを**表７**の手順で構想した。

表７　検証授業Ⅰの単元を構想する手順及び留意点

手順	留意点
１　生徒の実態把握	検証授業Ⅰ実施前の実態調査で，肯定的回答が少なかった項目 ［入試と関係なくても大切だ］［今の自分に役立つ］［将来の自分に役立つ］ ↓ 検証授業Ⅰに必要な学習 ［古人の心情を読み味わい，古典(古文)に興味をもたせる学習］
２　単元の目標設定	学習指導要領の「Ｃ　読むこと」の指導事項のウ ［文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み味わうこと。］ 単元の目標 ア　文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み取り，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしようとしている。（関心・意欲・態度） イ　文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み取り，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしている。（読む能力） ウ　文語のきまりの知識を活用して，古典の表現に即した内容理解を深めることができる。（知識・理解）
３　単元の評価規準の設定	関心・意欲・態度：①　文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み取ろうとしている。 読む能力：①　文章に描かれた人物，情景，心情を，表現に即して読み取っている。②　二つの文章に描かれた人物の心情を比較し，自分の感じ方，考え方について考えている。 知識・理解：①　文語のきまりを理解し，その知識を活用することで表現に即した内容の理解をより深めている。
４　教材の編成	教科書教材：［筒井筒］（幼なじみの恋の成就） 補助教材：［あづさ弓］（夫婦の別居後の破局） ↓ 同一のテーマ ［互いに思い合っている男女の恋愛の在り方］

5　文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用	係り結びの法則 筒井筒：この女をこそ得め　たれか上ぐべき〈強い愛情〉 あづさ弓：ただ今宵こそ　新枕すれ〈強い困惑〉 心情が強調される場面で使用 強調される語句を元に心情を読み深める
6　効果的な言語活動の設定	第１次 活用する文語のきまりについて理解する活動 第２次 「筒井筒」を読む活動　｜　「あづさ弓」を読む活動 第３次 二つの文を読み比べて考えたことを話し合う活動 第４次 単元を振り返り，まとめの文章を書く活動 「恋愛」をテーマに，「男女の恋愛の在り方について考える」という課題解決を図る読み比べ

それぞれの手順では，次のことに留意した。「生徒の実態把握」では，実態調査において古文の学習は「入試と関係なくても大切だ」，「今の自分に役立つ」，「将来の自分に役立つ」の項目に対する肯定的回答が少なかったことから，古典(古文)に興味をもたせ，古人の心情を読み味わう学習が必要であるという生徒の実態を把握した。

「単元の目標設定」では，学習指導要領の指導事項のウを踏まえて目標を設定した。関心・意欲・態度においては，古人の心情を読み取り，自分のものの見方，感じ方，考え方と照らして考えることを，読む能力においては，表現に即して人物の心情を読み取ることを，知識・理解においては，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用して内容理解を深めることを，それぞれ目標として設定した。

「単元の評価規準の設定」では，単元の目標を踏まえ，三つの観点の目標をより具体化し，読む能力を二つの評価規準に分けて設定した。

「教材の編成」では，生徒が興味をもちやすく，個人の心情を読み味わうことができる教材として『伊勢物語』の二つの章段により編成した。平安時代の貴族の男女の恋愛を描いた章段が多い『伊勢物語』の中でも，第23段「筒井筒」は「田舎」を舞台とする幼なじみの男女の恋愛を描いた章段であり，生徒がより共感しやすいと考えられる。また，この章段と同様に互いを想い合っていながら対照的な結末を迎える第24段「あづさ弓」を補助教材として編成した。

「文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用」では，読み取るべき人物の心情が強調される場面で使用されるものとして，活用する文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を，中学校での既習知識であり，前単元において習得した「品詞」や「活用形」についての知識・技能も関係する「係り結びの法則」とした。

「効果的な言語活動の設定」では，恋愛の在り方を描いた文章を読む活動だけでなく，二つの文章を読み比べる活動，読み比べたことについて話し合う活動，そして，話合いを経て考えたことをまとめの文章として書く活動を単元の各過程に位置付けて設定した。

(2)　検証授業Ⅰの実際

ア　単元名及び実施期間

単元名　:「『伊勢物語』に見られる二つの恋愛の在り方について考える」

実施学年：県立鹿屋高等学校　１年１組　37人

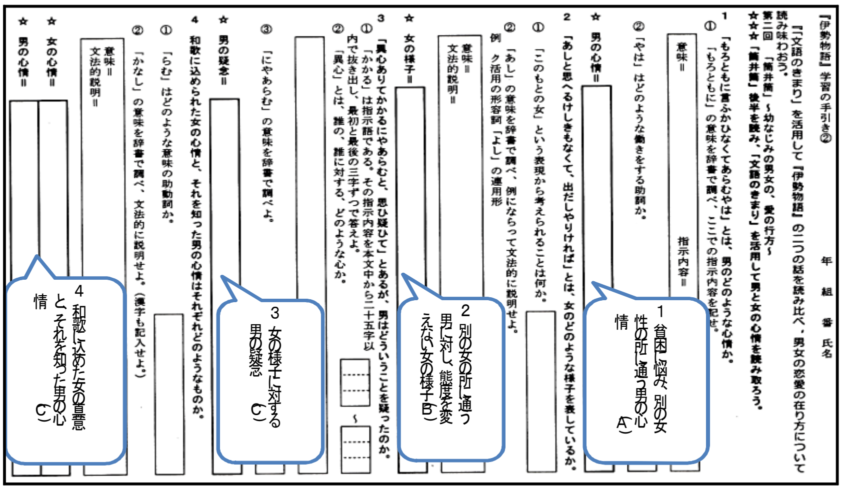
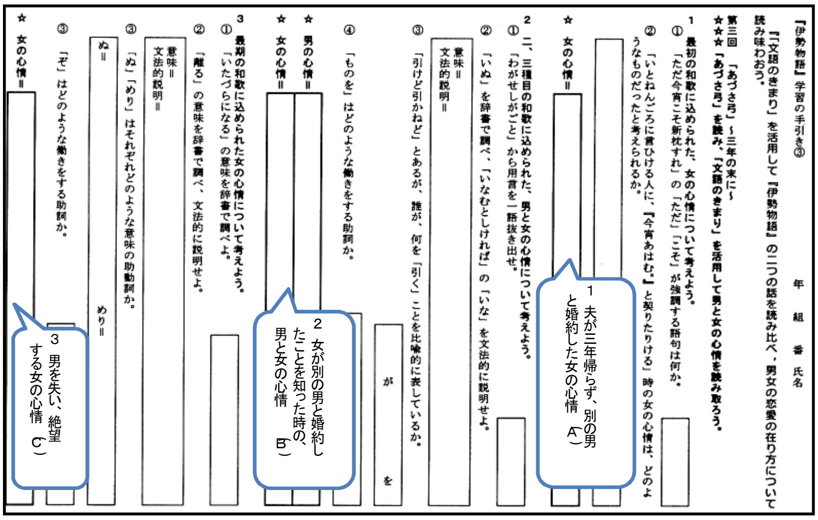
実施時期：平成25年７月

イ　単元の計画(５時間扱い)

次	言語活動	各時の目標	主な学習活動
1	単元を通して課題を解決する 話し合う活動	・　文語のきまりの知識を活用して，読みを深める方法を知る。	・　恋愛についての考えを話し合う。 「伊勢物語」に見られる恋愛の在り方について考える。 ・　活用する文語のきまりに関する知識・技能を確認する。 ・　「筒井筒」について，学習の手引き①を用いて「係り結びの法則」を活用して人物の心情を考える方法を知る。 知識・理解①(記述の確認)
2	読む活動	・　「筒井筒」における男女の心情について，文語のきまりの知識を活用して考える。	・　教科書教材について，学習の手引き②を用いて文語のきまりに関する知識を活用して男と女の心情を考える。 読む能力①(記述の確認)
	読む活動	・　「あづさ弓」における男女の心情について，文語のきまりの知識を活用して考える。	・　補助教材について，学習の手引き③を用いて文語のきまりを活用して男と女の心情を考える。 読む能力①(記述の確認)
3	読み比べる活動／話し合う活動	・　「筒井筒」と「あづさ弓」を読み比べ，恋愛の在り方について考える。	・　学習の手引き④を用いて，教科書教材と補助教材とを比較し，共通点と相違点を踏まえて恋愛の在り方についてまとめる。 読む能力②(記述の分析)
4	書く活動	・　単元全体を振り返り，まとめの文章を書く。	・　学習の手引き⑤を用いて『伊勢物語』に描かれた男女の恋愛の在り方について考えたことを文章にまとめる。 関心・意欲・態度①(記述の分析)

ウ　授業の実際と考察

ここでは，先に挙げた研究の視点１～３について，実際の授業展開に沿って述べていく。１の「古典(古文)を主体的に読む能力の育成を目指す，課題解決型の学習指導の在り方」については，第１次で学習課題を提示し，単元の各過程を経て第４次でまとめさせた。２の「習得した文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習指導の在り方」については，第１次で活用する文語のきまりを確認し，第２次以降では学習の手引きを用いて活用しながら課題について考えさせた。３の「古典(古文)を教材とする「読むこと」の指導における，話し合う活動や書く活動も含めた言語活動の充実」については，単元の各過程に配置した各活動が，読み比べたことについて話し合ったり書いたりする活動として学習効果を発揮するようにした。なお，本研究における検証授業は，生徒の現状に鑑み適切な学習課題を設定し(視点１)，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の実際の習得状況に合わせた授業内容や学習の手引きを作成し(視点２)，生徒の話す・聞く・読む・書く力の現状に合わせた言語活動を行う(視点３)ために，通常の授業担当者と協力し合い，年間指導計画に沿った単元を作り上げた。

次	目標	主な学習活動
1	・　学習課題及びその解決に活用する文語のきまりを理解する。 話し合う活動 話合いを基に，学習課題を設定した。 視点１	・　現代における恋愛に対する考えについて話し合う。 ・　現代における恋愛の在り方を列挙する。 ・　挙げられた恋愛の在り方を類型化する。 ・　古典(古文)に描かれる恋愛の在り方について考える。 ・　学習課題を設定し，課題に沿って二つの教材を読み比べ，課題の解決を目指すことを理解する。 学習課題：『伊勢物語』の二つの話を読み，恋愛の在り方について考える。 ・　活用する文語のきまり(係り結びの法則)について確認する。
2	・　「筒井筒」について，学習の手引きを用いて文語のきまりを活用して男と女の心情を考える。 読む活動 学習の手引きを基に，教科書教材を読み取った。 １・２・３・４ 文章の解釈 ⇩ Ａ・Ｂ・Ｃ 人物，情景，心情の分析 ⇩ 気付いたことのまとめ 視点２	・　係り結びの法則が用いられている部分に注目して，文語のきまりを活用して考える。  『伊勢物語』学習の手引き②　年　組　番　氏名 『「文語のきまり」を活用して『伊勢物語』の二つの話を読み比べ，男女の恋愛の在り方について読み味わおう。 第二回　「筒井筒」～幼なじみの男女の、愛の行方～ ☆☆「筒井筒」後半を読み、「文語のきまり」を活用して男と女の心情を読み取ろう。 1　「もろともに言ふかひなくてあらむやは」とは、男のどのような心情か。 ①　「もろともに」の意味を辞書で調べ、ここでの指示内容を記せ。 意味＝　指示内容＝ ②　「やは」はどのような働きをする助詞か。 ☆　男の心情＝ 2　「あしと思へるけしきもなくて、出だしやりければ」とは、女のどのような様子を表しているか。 ①　「このもとの女」という表現から考えられることは何か。 ②　「あし」の意味を辞書で調べ、例にならって文法的に説明せよ。 例　ク活用の形容詞「よし」の連用形 意味＝　文法的説明＝ ☆　女の様子＝ 3　「異心ありてかかるにやあらむと、思ひ疑ひて」とあるが、男はどういうことを疑ったのか。 ①　「かかる」は指示語である。その指示内容を本文中から二十五字以内で抜き出し、最初と最後の三字ずつで答えよ。　～ ②　「異心」とは、誰の、誰に対する、どのような心か。 ③　「にやあらむ」の意味を辞書で調べよ。 ☆　男の疑念＝ 4　和歌に込められた女の心情と、それを知った男の心情はそれぞれどのようなものか。 ①　「らむ」はどのような意味の助動詞か。 ②　「かなし」の意味を辞書で調べ、文法的に説明せよ。（漢字も記入せよ。） 意味＝　文法的説明＝ ☆　女の心情＝ ☆　男の心情＝ 1　貧困に悩み、別の女性の所に通う男の心情（A） 2　別の女の所に通う男に対し、態度を変えない女の様子（B） 3　女の様子に対する男の疑念（C） 4　和歌に込めた女の真意と、それを知った男の心情（C） 「筒井筒」の学習の手引きの１～４では，次のことを読み取った。 １　貧困に悩み，別の女性の所に通う男の心情　※「やは～」← ２　別の女の所に通う男に対し，態度を変えない女の様子 ３　女の様子に対する男の疑念　※「にやあらむ」← ４　和歌に込めた女の真意と，それを知った男の心情 係り結び ⇩ Ａ　別の女性へと気持ちが離れた時の男の心情 Ｂ　男の心の変化に，身を引きながら愛し続けた女の心情 Ｃ　女の真意を知って，愛を戻した男の行動 ⇩ 愛を貫いた女が，その愛を実らせた。
	・　「あづさ弓」について，学習の手引きを用いて文語のきまりを活用して男と女の心情を考える。 読む活動	・　係り結びの法則が用いられている部分に注目して，文語のきまりを活用して考える。  『伊勢物語』学習の手引き③　年　組　番　氏名 『「文語のきまり」を活用して『伊勢物語』の二つの話を読み比べ，男女の恋愛の在り方について読み味わおう。 第三回　「あづさ弓」～三年の末に～ ☆☆「あづさ弓」を読み、「文語のきまり」を活用して男と女の心情を読み取ろう。 1　最初の和歌に込められた、女の心情について考えよう。 ①　「ただ今宵こそ新枕すれ」の「ただ」「こそ」が強調する語句は何か。 ②　「いとねんごろに言ひける人に、『今宵あはむ。』と契りたりける」時の女の心情は、どのようなものだったと考えられるか。 ☆　女の心情＝ 2　二、三種目の和歌に込められた、男と女の心情について考えよう。 ①　「わがせしがごと」から用言を一語抜き出せ。 ②　「いぬ」を辞書で調べ、「いなむとしければ」の「いな」を文法的に説明せよ。 意味＝　文法的説明＝ ③　「引けど引かねど」とあるが、誰が、何を「引く」ことを比喩的に表しているか。 が　を ④　「ものを」はどのような働きをする助詞か。 ☆　男の心情＝ ☆　女の心情＝ 3　最期の和歌に込められた女の心情について考えよう。 ①　「いたづらになる」の意味を辞書で調べよ。 ②　「離る」の意味を辞書で調べ、文法的に説明せよ。 意味＝　文法的説明＝ ③　「ぬ」「めり」はそれぞれどのような意味の助動詞か。 ぬ＝　めり＝ ③　「ぞ」はどのような働きをする助詞か。 ☆　女の心情＝ 1　夫が三年帰らず、別の男と婚約した女の心情（A） 2　女が別の男と婚約したことを知った時の、男と女の心情（B） 3　男を失い、絶望する女の心情（C）

学習の手引きを基に，補助教材を読み取った。

１・２・３ 文章の解釈
⇩
Ａ・Ｂ・Ｃ 人物，情景，心情の分析
⇩
気付いたことのまとめ

視点２

「あづさ弓」の学習の手引きの１～３では，次のことを読み取った。

1. 夫が３年帰らず，別の男と婚約した女の心情　※「こそ～」←係り結び
2. 女が別の男と婚約したことを知った時の，男と女の心情
3. 男を失い，絶望する女の心情　※「ぞ～」←係り結び

⇩

- Ａ　別の男性へと気持ちが離れた時の女の心情
- Ｂ　女の心の変化に，身を引きながら愛し続けた男の行動
- Ｃ　男の真意を知って，愛を戻そうとした女の行動

⇩

愛を貫こうとした女が，その愛を実らせることができなかった。

3

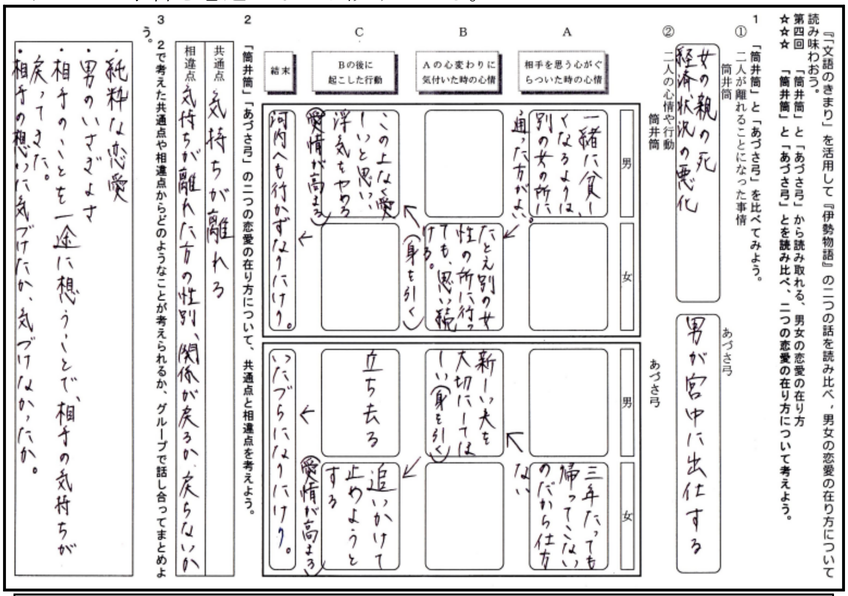
・　学習の手引きを用いて，「筒井筒」と「あづさ弓」とを読み比べる。

読み比べる活動

・　読み比べて考えたことをグループで話し合い，まとめる。

話し合う活動

・　学習の手引きに示されたＡ～Ｃの読み比べるためのポイントを基に，これまでの学習を想起しながら読み比べる。



1. 「筒井筒」と「あづさ弓」の読み比べ
   - ①　男と女が離れることになった事情
   - ②　二人の行動や心情 ←
2. 二つの恋愛の在り方の共通点と相違点
3. 恋愛についての，グループによる意見交流

	筒井筒	あづさ弓
Ａ	男の心情	女の心情
Ｂ	女の心情	男の心情
Ｃ	男の行動	女の行動

読み比べる活動と話し合う活動により，学習課題に対する考えをまとめた。

視点３

4

・　グループごとの意見の発表後，各自で学習の手引きを用いて恋愛について考えたことを文章にまとめる。

書く活動

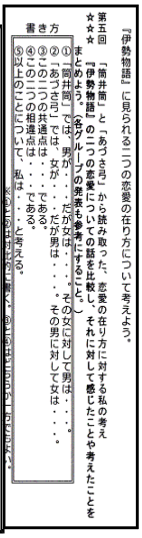
・　グループでの話し合いや他のグループの発表を踏まえて，改めて『伊勢物語』の二つの話の内容から男女の恋愛の在り方について感じたことや考えたことを文章に書く。

・　学習の手引きに書き方のモデルを示した。以下は生徒の書いた文章の一例である。生徒は【　】内を考えて書いた。

「筒井筒」では，男が【浮気をしてしまった】。だが，女は【信じて待っていた】。その女に対して男は【この上なく愛しいと思い，浮気をやめた】。「あづさ弓」では，女が【男の帰りを待ちきれず，再婚の約束をした】。だが，男は【女のことを考え，身を引いた】。その男に対して女は【自分の気持ちに気付き追いかけて止めようとした】。

この二つの共通点は，【気持ちが離れることと，どちらかが身を引く】ということである。この二つの相違点は，【気持ちが離れたのは「筒井筒」は男で，「あづさ弓」は女であるということ。そして，関係が元に戻るか戻らないか】ということである。

以上のことについて，私は【貧しかったり，お互いが遠く離れていたりと自分のおかれた状況が良くなかったとしても，相手を信じ，自分の気持ちを大事にできればいいと思った。どの年代でも好きな人を想う気持ちには変わりはないと感じた】。



現代の恋愛にも通じるものとして読んでいる。

視点１

(3)　検証授業Ⅰの成果と課題

ア　成果

(ｱ)　現代語訳にとどまらず，「『伊勢物語』の二つの話を読み比べ，恋愛の在り方について考える」という単元の学習課題を解決する課題解決型の学習指導を実践できた。授業前に比べ，古文の学習に対する意識の向上がみられた(**図４**)。

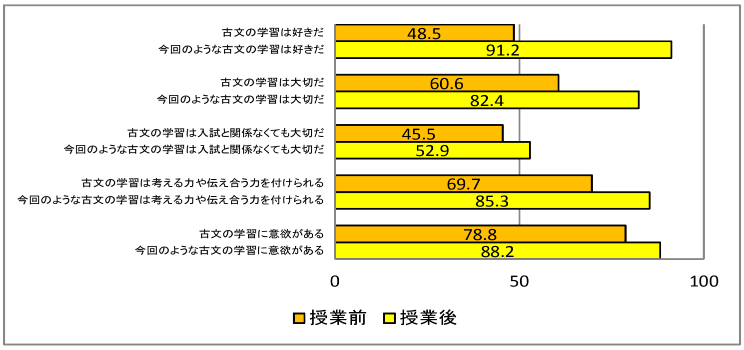


図４　検証授業Ⅰ前後の古文の学習に対する意識

(ｲ)　「係り結びの法則」の知識を活用して人物の心情を考えさせたことで，現代語訳だけでは分かりにくい部分まで理解させることができた。「文章を読むだけでは分からない人物の心情が分かり楽しかった。」などの感想がみられた。

(ｳ)　「読むこと」の学習指導において，二つの恋愛の在り方について読み比べる活動，二つの恋愛の在り方についてグループで話し合う活動，グループでの話合いによって深めた自分の考えをまとめて文章を書く活動を単元の中に位置付けて行った。読み比べる活動については「比べることで共通点や相違点が見つかって面白かった。」などの感想がみられた。

イ　課題

(ｱ)　学習課題の解決によって主体的に読む能力を育成するために，単元の学習課題の設定の仕方を工夫する必要がある。

(ｲ)　今回の教材は男女の恋愛についての物語であり，生徒の意欲を喚起しやすいものとして授業を行った。物語以外の教材でも，その特色に応じて文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用して考えることができる手立てを工夫する必要がある。

(ｳ)　今回の実践では，話し合う活動において「思考・判断・表現」を十分にさせることができなかった。話し合うためには生徒一人一人に考えをもたせなければならない。話し合う活動のための自分の考えをもたせる手立てを工夫する必要がある。

5　検証授業Ⅱの実施と考察

(1)　検証授業Ⅱを構想する手順

検証授業Ⅰの成果と課題を踏まえ，検証授業Ⅱを，次の**表８**の手順で構想した。

表８　検証授業Ⅱの単元を構想する手順及び留意点

手順	留意点
1　生徒の実態把握	検証授業Ⅰ終了後の調査で，肯定的回答が少なかった項目 ［入試と関係なくても大切だ］［今の自分に役立つ］［将来の自分に役立つ］ ↓ 検証授業Ⅱに必要な学習 ［古典(古文)に描かれる古人の姿を現代の自分に当てはめて考えさせる学習］
2　単元の目標設定	学習指導要領の「Ｃ　読むこと」の指導事項のエ ［文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図を捉えたりすること。］ 単元の目標　⇩ ア　書き手の意図を捉え，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしようとしている。(関心・意欲・態度) イ　文章に描かれた書き手の意図を比較し，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしている。(読む能力) ウ　文語のきまりの知識を活用して，古典の表現に即した内容理解を深めることができる。(知識・理解)

3　単元の評価規準の設定	**関心・意欲・態度** ①　書き手の意図を捉え，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしようとしている。 **読む能力** ①　文章の構成や展開を確かめ，書き手の意図を捉えている。 ②　文章に描かれた書き手の意図を比較し，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしている。 **知識・理解** ①　文語のきまりを理解し，その知識を活用することで表現に即した内容の理解をより深めている。
4　教材の編成	教科書教材 ある人，弓射ることを習ふに 次の機会がある時の油断 補助教材 高名の木登り 難所を乗り切った時の油断 同一のテーマ 人はどういう時に油断してしまうのか
5　文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用	検証授業Ⅰ 係り結びの法則 心情が強調される場面で使用 検証授業Ⅱ 助動詞＋助詞 ある人，弓射る… ん＋や〈反語〉 高名の木登り しか＋ば〈順接確定条件〉 ものの見方が大きく転換される部分で使用
6　効果的な言語活動の設定	第１次 活用する文語のきまりについて理解する活動 第２次 「ある人…」を読む活動　「高名の…」を読む活動 第３次 二つの文を読み比べて考えたことを話し合う活動 第４次 単元を振り返り，まとめの文章を書く活動 「人が油断する時」をテーマに，「今やる人になるには」という課題解決を図る読み比べ

「生徒の実態把握」では，検証授業Ⅰ終了後の調査において古文の学習は「入試と関係なくても大切だ」,「今の自分に役立つ」,「将来の自分に役立つ」の肯定的回答が，授業前に比べて向上はしたものの十分ではなかったことを踏まえ，古典(古文)に描かれる古人の姿が現代の自分に当てはめて考えさせる学習が必要であるという生徒の実態を把握した。また，検証授業Ⅰの後に助動詞について取り立てて指導を行っており，古文の学習における文法の比重が増えたためか，学習に対する意欲がやや低下しており，意欲の向上につながるような学習課題を設定する必要があるという実態を把握した。

「単元の目標設定」では，学習指導要領の指導事項のエを踏まえて設定した。関心・意欲・態度においては，読み取った書き手の意図を踏まえて，自分のものの見方，感じ方，考え方と照らして考えることを，読む能力においては，表現に即して書き手の意図を読み取ることを，知識・理解においては，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用して内容理解を深めることを，それぞれ目標として設定した。

「単元の評価規準の設定」では，単元の目標を踏まえ，三つの観点の目標をより具体化し，読む能力を二つの評価規準に分けて設定した。

「教材の編成」では，生徒が現代の自分に当てはめて考えることができる教材として『徒然草』の二つの章段により編成した。『徒然草』は当時の様々な物事に対する兼好法師の考えが読み取れる随筆教材であり，時代を超えて現代にも共通する人間存在の姿が描かれた章段も多い。第92段「ある人，弓射ることを習ふに」では，「次の機会がある」という無意識の油断が失敗を招くことを指摘し，今この時に油断なく実行することの大切さが訴えられる。やるべきことを後回しにしてしまうことは現代の我々にも通じており，生徒も共感しやすいと考えられる。同じく「戒め」についての筆者の考えを記述した第109段「高名の木登り」と読み比べる

活動ができると考え，補助教材として編成した。

「文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用」では，活用する文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を，前単元及び夏季休業中の補習等において習得した「助動詞」についての知識・技能を中心に，筆者のものの見方が大きく転換されるように描かれる部分に使用される「助動詞と助詞の連続部分」とした。

「効果的な言語活動の設定」では，読み比べる活動を中心に，話し合う活動，書く活動を単元の各過程に位置付けて設定した。本単元では，書き手である兼好法師の考えが表現された作品を読むことで「他者」を明確に意識させることができると考える。さらに，他の学習者と話し合う活動においても「他者」と出会わせることで，自己の相対化の機会を与え，自分の考え方を捉え直させたいと考えた。検証授業Ⅰの課題として，話し合う活動のための自分の考えをもたせる手立ての工夫が必要であると考えたため，事前に自分の意見を書いた上で話し合うという手立てを行うこととした。

(2) 検証授業Ⅱの実際

ア 単元名及び実施期間

単元名 :「『徒然草』から学ぶ，今やる人になるための考え方」

実施学年：県立鹿屋高等学校 1年1組 37人

実施時期：平成25年11月

イ 単元の計画（4時間扱い）

次	言語活動	各時の目標	主な学習活動
1	単元を通して課題を解決する 話し合う活動	・ 活用する文語のきまりの知識を確認する。	・ 人間の油断について話し合う。 「徒然草」に学ぶ，今やる人になるための考え方。 ・ 活用する文語のきまりに関する知識・技能を確認する。 知識・理解①（記述の確認）
2	読む活動	・ 「ある人，…」における兼好の考えについて文語のきまりの知識を活用して考える。	・ 教科書教材について，学習の手引き①を用いて文語のきまりに関する知識を活用して兼好の主張を考える。 読む能力①（記述の確認）
	読む活動	・ 「高名の木登り」における兼好の考えについて文語のきまりの知識を活用して考える。	・ 補助教材について，学習の手引き②を用いて文語のきまりに関する知識を活用して兼好の主張を考える。 読む能力①（記述の確認）
3	読み比べる活動 話し合う活動	・ 二つの章段を読み比べ，どのような時に油断が生じてしまうのかを考える。	・ 学習の手引き③を用いて，教科書教材と補助教材とを比較して共通点と相違点を考え，初心者とある程度上達した人に分けてどのような時に油断が生じるかを考える。 読む能力②（記述の分析）
4	書く活動	・ 単元全体を振り返って，まとめの文章を書く。	・ 学習の手引き④を用いて，やらなければならない「今」をどのように見極めるかということについて，考えたことを文章にまとめる。 関心・意欲・態度①（記述の分析）

ウ 授業の実際と考察

検証授業Ⅰと同様に，研究の視点１～３について，授業の実際に沿って述べる。

視点１と３については検証授業Ⅰと同様であるが，視点２については，検証授業Ⅰの後に助動詞について取り立てて指導を行っており，文章の中での助動詞の用法について確認する時間を確保しなければならなかった。そのため，「学習課題の解決のために文語のきまりを活用する」という意識を維持することに注意を要した。なお，検証授業Ⅱも，通常の授業担当者と協力して単元を作り上げた。

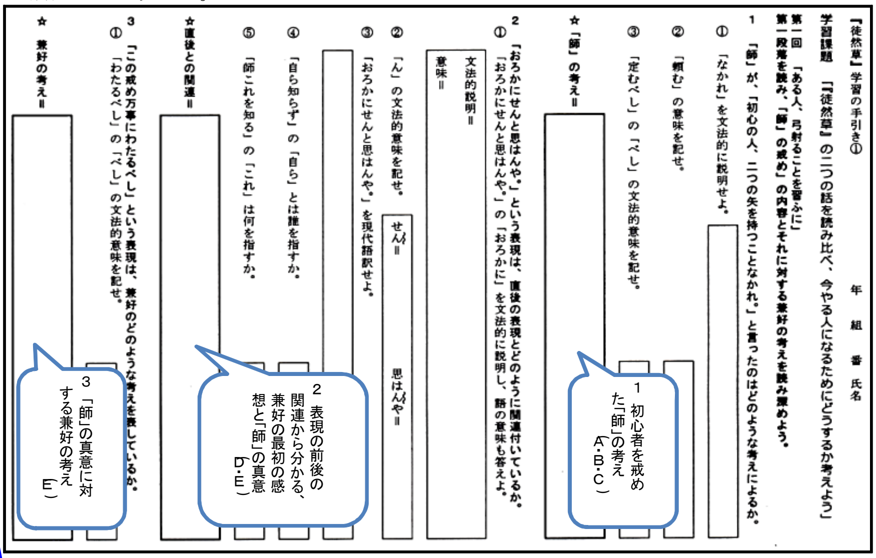
<table>
<tr><th>次</th><th>目標</th><th>主な学習活動</th></tr>
<tr><td>1</td><td>・　単元の学習課題を理解する。
話し合う活動

話合いを基に，学習課題を設定した。
視点１</td><td>・　油断せずに「やるべき今」とはどういう時かについて話し合う。

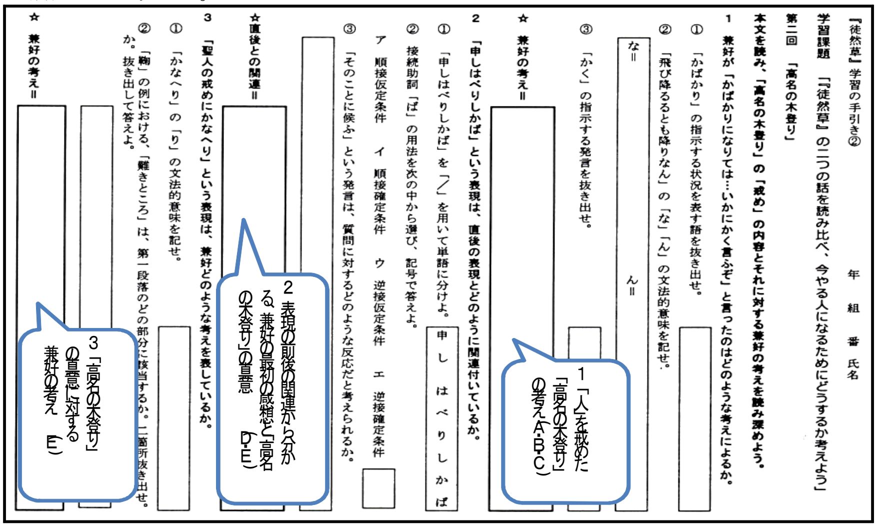
・　現代における油断の在り方を列挙する。
・　挙げられた油断の在り方を類型化する。
・　古典(古文)の世界に描かれた油断について考える。

・　学習課題を設定し，課題に沿って二つの教材を読み比べ，課題を解決する。
学習課題：『徒然草』の二つの話を読み，今やる人になる方法を考える。
・　活用する文語のきまり(助動詞，助詞)について確認する。</td></tr>
<tr><td>2</td><td>・　「ある人，弓射ることを習ふに」について，学習の手引きを用いて文語のきまりを活用して筆者の考えについて考える。
読む活動

学習の手引きを基に，教科書教材を読み取った。
１・２・３
文章の解釈
⇩
Ａ～Ｅ
人物，情景，心情の分析
⇩
気付いたことのまとめ
視点２</td><td>・　助動詞と助詞が連続して用いられている部分に注目して，文語のきまりを活用して考える。


『徒然草』学習の手引き①　年　組　番　氏名
学習課題　「『徒然草』の二つの話を読み比べ、今やる人になるためにどうするか考えよう」
第一回　「ある人、弓射ることを習ふに」
第一段落を読み、「師」の戒め」の内容とそれに対する兼好の考えを読み深めよう。
1　「師」が、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。」と言ったのはどのような考えによるか。
①　「なかれ」を文法的に説明せよ。
②　「頼む」の意味を記せ。
③　「定むべし」の「べし」の文法的意味を記せ。
☆「師」の考え＝
2　「おろかにせんと思はんや。」という表現は、直後の表現とどのように関連付いているか。
①　「おろかにせんと思はんや。」の「おろかに」を文法的に説明し、語の意味も答えよ。
文法的説明＝
意味＝
②　「ん」の文法的意味を記せ。
せん＝　思はんや＝
③　「おろかにせんと思はんや。」を現代語訳せよ。
④　「自ら知らず」の「自ら」とは誰を指すか。
⑤　「師これを知る」の「これ」は何を指すか。
☆直後との関連＝
3　「この戒め万事にわたるべし」という表現は、兼好のどのような考えを表しているか。
①　「わたるべし」の「べし」の文法的意味を記せ。
☆　兼好の考え＝

「ある人，弓射ることを習ふに」の学習の手引きの１～３では次のことを読み取った。
１　初心者を戒めた「師」の考え
２　表現の前後の関連　※「思はんや。」←　助動詞・助詞(反語)
３　「師」の真意に対する兼好の考え
⇩
Ａ　戒められた「ある人」の人物像　Ｂ　「師」の戒めの内容
Ｃ　「師」が戒めたタイミング　Ｄ　兼好の最初の考え
Ｅ　戒めた「師」の真意
⇩
「まだ次がある時に生じる無意識の油断」を戒めた。</td></tr>
<tr><td></td><td>・　「高名の木登り」について，学習の手引きを用いて文語のきまりを活用して筆者の考えについて考える。
読む活動</td><td>・　助動詞と助詞が連続して用いられている部分に注目して，文語のきまりを活用して考える。


『徒然草』学習の手引き②　年　組　番　氏名
学習課題　「『徒然草』の二つの話を読み比べ、今やる人になるためにどうするか考えよう」
第二回　「高名の木登り」
本文を読み、「高名の木登り」の「戒め」の内容とそれに対する兼好の考えを読み深めよう。
1　兼好が「かばかりになりては…いかにかく言ふぞ」と言ったのはどのような考えによるか。
①　「かばかり」の指示する状況を表す語を抜き出せ。
②　「飛び降るるとも降りなん」の「な」「ん」の文法的意味を記せ。
な＝　ん＝
③　「かく」の指示する発言を抜き出せ。
☆　兼好の考え＝
2　「申しはべりしかば」という表現は、直後の表現とどのように関連付いているか。
①　「申しはべりしかば」を「／」を用いて単語に分けよ。
申しはべりしかば
②　接続助詞「ば」の用法を次の中から選び、記号で答えよ。
ア　順接仮定条件　イ　順接確定条件　ウ　逆接仮定条件　エ　逆接確定条件
③　「そのことに候ふ」という発言は、質問に対するどのような反応だと考えられるか。
☆直後との関連＝
3　「聖人の戒めにかなへり」という表現は、兼好どのような考えを表しているか。
①　「かなへり」の「り」の文法的意味を記せ。
②　「鞠」の例における、「難きところ」は、第一段落のどの部分に該当するか。二箇所抜き出せ。抜き出して答えよ。
☆　兼好の考え＝
</td></tr>
</table>

3

学習の手引きを基に，補助教材を読み取った。

1・2・3
文章の解釈
⇩
A～E
人物，情景，心情の分析
⇩
気付いたことのまとめ

視点２

「高名の木登り」の学習の手引きの１～３では次のことを読み取った。

1　「人」を戒めた「高名の木登り」の考え
2　表現の前後の関連　←「申しはべりしかば」←　助動詞・助詞（確定条件）
3　「木登り」の真意に対する兼好の考え

⇩

A　戒められた「人」の人物像　B　「木登り」の戒めの内容
C　「木登り」が戒めたタイミング　D　兼好の最初の考え
E　戒めた「木登り」の真意

⇩

「危険を乗り越えた時に生じる無意識の油断」を戒めた。

・　学習の手引きを用いて，「ある人，弓射ることを習ふに」と「高名の木登り」とを読み比べる。

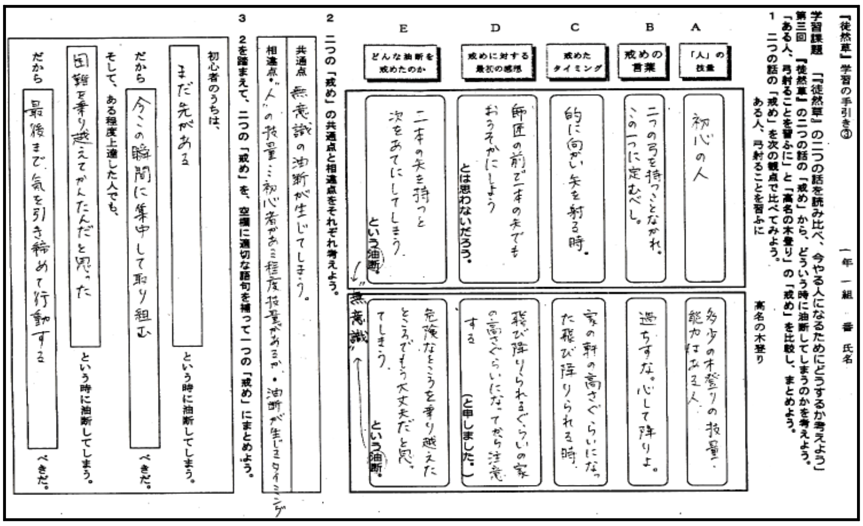
読み比べる活動

・　読み比べて考えたことを，グループで話し合い，まとめる。

話し合う活動

読み比べる活動と話し合う活動により，学習課題に対する考えをまとめさせた。

・　学習の手引きに示された，A～Eの読み比べるためのポイントを基に，これまでの学習を想起しながら読み比べる。


『徒然草』学習の手引き③　一年一組　番　氏名
学習課題　「『徒然草』の二つの話を読み比べ，今やる人になるためにどうするか考えよう」
第三回　『徒然草』の二つの話の「戒め」から，どういう時に油断してしまうのかを考えよう。
1　「ある人，弓射ることを習ふに」と「高名の木登り」の「戒め」を比較し，まとめよう。
二つの話の「戒め」を次の観点で比べてみよう。

	A 「人」の技量	B 戒めの言葉	C 戒めたタイミング	D 戒めに対する最初の感想	E どんな油断を戒めたのか
ある人，弓射ることを習ふに	初心の人	二つの弓を持つことなかれ。この一つに定むべし。	的に向かい矢を射る時。	師匠の前で一本の矢でもおろそかにしようとは思わないだろう。	二本の矢を持つと次をあてにしてしまうという油断。
高名の木登り	多少の木登りの技量・能力はある人。	過ちすな。心して降りよ。	家の軒の高さぐらいになった飛び降りられる時。	飛び降りられるぐらいの家の高さぐらいになってから注意する（と申しました。）	危険なところを乗り越えたところでもう大丈夫だと思ってしまうという油断。

“無意識”

2　二つの「戒め」の共通点と相違点をそれぞれ考えよう。
共通点　無意識の油断が生じてしまう。
相違点　“人”の技量…初心者かある程度技量があるか，・油断が生じるタイミング

3　2を踏まえて，二つの「戒め」を，空欄に適切な語句を補って一つの「戒め」にまとめよう。
初心者のうちは，【まだ先がある】という時に油断してしまう。
だから【今この瞬間に集中して取り組む】べきだ。
そして，ある程度上達した人でも，【困難を乗り越えてかんたんだと思った】という時に油断してしまう。
だから【最後まで気を引き締めて行動する】べきだ。

1　「ある人，弓射ることを習ふに」と「高名の木登り」の読み比べ
2　二つの「戒め」の共通点と相違点
3　一つにまとめた「戒め」についての，グループによる意見交流

4

・　グループごとの意見を発表した後，各自で学習の手引きを用いて考えたことを文章にまとめる。

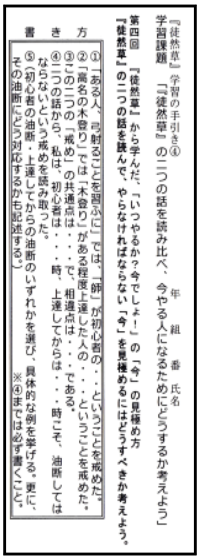
書く活動

現代の自分にとっての「戒め」として読んでいる。

視点１

・　グループでの話し合いや他のグループの発表を踏まえて，改めて『徒然草』の二つの話の内容から人間が油断する時，油断しないように気を付けるべき時について，現代の例を挙げながら文章に書く。
・　学習の手引きに書き方のモデルを示した。以下は生徒の書いた文章の一例である。生徒は【　】内を考えて書いた。

「ある人，弓射ることを習ふに」では，「師」が初心者の【二本の矢を持つと次をあてにしてしまう】ということを戒めた。「高名の木登り」では，「木登り」がある程度上達した人の【危険な所をのりこえた所でもう大丈夫だと思ってしまう】ということを戒めた。
この二つ「戒め」の共通点は，【無意識の油断が生じてしまう】ということで，相違点は，【初心者かある程度技量がある人かということと，油断が生じるタイミング】である。
二つの話から，私は初心者は【チャンスが一回だけではない】時，上達してからは【大変な所を乗り越えた】時こそ，油断してはならないという戒めを読み取った。
【私は，初心者の油断をしてしまう。週末課題が出された時，金曜日は，土日があるから寝ようと思うし，土曜日は，日曜日があるから大丈夫だと思ってしまうし，日曜日は，夜があるから大丈夫だと思ってしまい，そのまま日が暮れてしまう。この油断をこれからしないように，金曜日から取り組みたい。】


『徒然草』学習の手引き④　年　組　番　氏名
学習課題　「『徒然草』の二つの話を読み比べ，今やる人になるためにどうするか考えよう」
第四回　『徒然草』から学んだ，「いつやるか？今でしょ！」の「今」の見極め方
『徒然草』の二つの話を読んで，やらなければならない「今」を見極めるにはどうすべきか考えよう。
書き方
①「ある人，弓射ることを習ふに」では，「師」が初心者の・・・ということを戒めた。
②「高名の木登り」では「木登り」がある程度上達した人の・・・ということを戒めた。
③この二つの「戒め」の共通点は・・・で，相違点は・・・である。
④二つの話から，私は，初心者は・・・時，上達してからは・・・時こそ，油断してはならないという戒めを読み取った。
⑤（初心者の油断・上達してからの油断のいずれかを選び，具体的な例を挙げる。更に，その油断にどう対応するかも記述する。）
※④までは必ず書くこと。

(3)　検証授業Ⅱの成果と課題

ア　成果

(ｱ)　学習に対して意欲がやや低下していたという実態を踏まえて学習課題を「『徒然草』の二つの話を読み比べ，今やる人になるためにどうするか」と設定したことで，学習効果は高まったと考えられる。古文の学習に対する意識については，検証授業Ⅰほどの向上はみられなかったものの，授業前と比べて全ての項目で意識の向上がみられた(**図５**)。

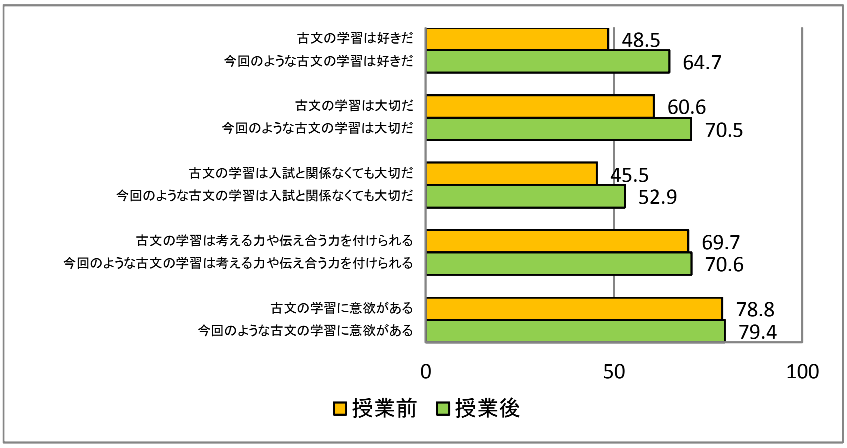


図５　検証授業Ⅱ前後の古文の学習に対する意識

(ｲ)　随筆教材で筆者の考えを読み取らせるために，助動詞と助詞が接続する部分に着目させて前後の文章との関連性を考えさせることで，「師」や「高名の木登り」の考え方と一般的な考え方との違いについてより明確に理解させることができた。「学習したことを使って古典を読むことで，よりよく意味を理解することができ，すごくおもしろいと思うし，なるほどと思うことが多々あった。」などの感想がみられた。

(ｳ)　「読むこと」の学習指導において，「油断」について描かれた二つの章段を読み比べる活動，二つの「戒め」を現代に通ずる「戒め」にまとめるために意見を話し合う活動，話合いによって深めた自分の考えをまとめて文章を書く活動を単元の中に位置付けて行った。読み比べる活動については「ひとつの話では分かりづらかった戒めの内容が，具体的になって良かった。」などの感想がみられた。

イ　課題

(ｱ)　古典(古文)の学習に対する意識の向上がみられ，新たに設けた「今後も古典(古文)を読んでいきたい」という質問に70.5%の生徒が肯定的に回答した。生徒が古典を主体的に読み，入試のためだけではなく，人生を豊かにするために古典に親しんでいくような学習指導の在り方について，更に追究していく必要がある。

(ｲ)　検証授業Ⅰにおいて「係り結びの法則」を活用して人物の心情を理解させたことと比較して，今回「助動詞と助詞の接続による前後の文との関連」を活用して筆者の論の展開を理解させることは難しく感じた生徒が多いようだった。文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習指導の在り方について，様々な教材を想定して考えていく必要がある。

(ｳ)　話し合う活動については，学習の手引きを回覧して感想を記入させる形で話し合わせたが，同意する意見ばかりで，他者の意見を踏まえて考えを広げ合うまでには至らなかった。意見の交流により，考えを広げたり深めたりさせる手立てについて，更に検討する必要がある。

６　検証授業Ⅰ及びⅡにおける成果と課題

(1)　検証授業Ⅰ及びⅡにおける成果

ア　教科書教材を中心として，『伊勢物語』では「恋愛」，『徒然草』では「油断」というテーマに基づいて補助教材を選定し，生徒自身にとっての意味や価値を見いだすことができる学習課題を設定することができた。

イ　１学期には「係り結びの法則」に関する知識・技能，２学期には「助動詞・助詞」に関する知識・技能を，それぞれ読みの視点に沿って活用して読む学習指導を行うことができた。

ウ　学習指導要領の言語活動例エに基づき，『伊勢物語』と『徒然草』の学習指導のモデルを作成し，そのモデルに基づいて単元の言語活動を貫くことができた。

(2)　検証授業Ⅰ及びⅡにおける課題

ア　教科書教材と共通のテーマをもつ補助教材との編成の仕方を工夫する必要がある。

イ　３学期の「敬語」に関する知識・技能を活用して読む学習指導の在り方についても工夫する必要がある。

ウ　言語活動例エ以外の言語活動でも，単元を貫く言語活動として工夫する必要がある。

Ⅳ　研究のまとめ

1　研究の成果

(1)　古典(古文)の物語や随筆教材の学習においても，単元の課題を設定し，それを解決する学習を行うことで，生徒が他者と交流しながら自分の考え方を豊かにする主体的な読みの能力を育成する学習指導を行うことができた。

(2)　文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能について，年間指導計画の中に位置付けて，学習の内容の定着の状況に応じた学習指導を行うことができた。

(3)　古典(古文)を教材とする「読むこと」の指導において，単元を通して課題を解決する活動に，読み比べる活動だけでなく，話し合う活動や書く活動も位置付けて，学習効果を高めることができた。

2　研究の課題

(1)　古文の学習に対する生徒の意識は，「古文の学習は入試と関係なくても大切だ」「古文の学習は将来の自分に役立つ」の質問に対する肯定的回答の数値が検証授業Ⅰ及びⅡの後で変化しなかった（**図６**）。学習課題の設定について，今回扱った教材以外においても，教材の特性に応じた学習課題を設定し，生徒が自分にとっての意味や価値を発見することができるようにする必要がある。

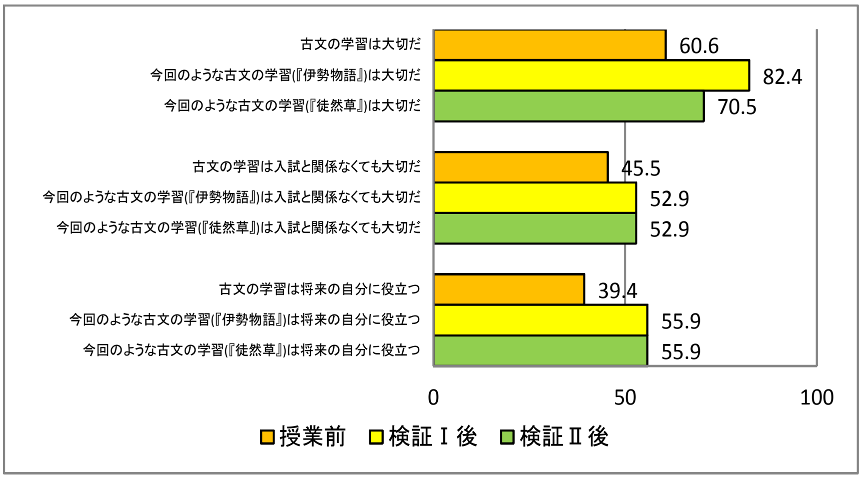


図６　古文の学習に対する意識の変化

(2)　中学校までの指導の実態を的確に把握するとともに，「国語総合」の後に選択履修となる「古典Ａ」「古典Ｂ」の指導においても，文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を活用する指導の年間指導計画を作成するなど，系統的な指導のための工夫を行う必要がある。

(3)　読み比べる活動については，今回は同一作品の二つの文章を読み比べる活動を行った。これ以外にも，異なる作品の文章を読み比べる活動などがあり，教材や発達段階に応じて別の形の指導の在り方についても考察する必要がある。

【引用文献】

*1)　田近洵一　著　『創造の〈読み〉新論　―文学の〈読み〉の再生を求めて―』
2013　東洋館

*2,3)　日本国語教育学会　編　『豊かな言語活動が拓く　国語単元学習の創造　Ⅰ理論編』
2010　東洋館

*4)　田中孝一　著　「国語科教育改善の基本方向(二)新しい国語科教育課程の編成に向けて」『中等教育資料』　平成15年２～４月号　ぎょうせい

*5)　西辻正副　著　「高等学校国語の指導の改善(43)新学習指導要領を踏まえた指導と評価の具体的な展開③」『中等教育資料』　平成25年２月号　学事出版

*6)　大西道雄　著　『国語科授業づくりの理論と実際』　2013　渓水社

【参考文献】

○　文部科学省　『高等学校学習指導要領解説　国語編』　平成22年　教育出版

○　日本国語教育学会　『国語教育辞典』　2001　朝倉書店

○　大村はま　著　『大村はま国語教室　第３巻　古典に親しませる学習指導』
昭和58年　筑摩書房

○　鳴島甫・高木展郎　編　『高等学校新学習指導要領の展開　国語科編』
2010　明治図書

○　全国大学国語教育学会　編　『新たな時代を拓く　中学校・高等学校国語科教育研究』
2010　学芸図書

○　西辻正副　編　『国語の授業を変える　1　評価規準をどう創るか　中・高等学校編』
平成23年　明治書院

○　桑原隆　著　『言語活動主義・言語生活主義の探究　―西尾実国語教育論の展開と発展―』
1998　東洋館

○　古典文学教材研究会　編　『古典文学解釈講座　第13巻　王朝物語集』
1994　三友社

○　古典文学教材研究会　編　『古典文学解釈講座　第９巻　徒然草　一』
1993　三友社

長期研修者〔前田　寛明〕
担 当 所 員〔鎌田　政司〕

【研究の概要】

本研究は，古典(古文)を主体的に読む能力を育成するために，「課題解決による主体的な読み」「文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能の活用」「言語活動の充実」の３項目を研究の柱とし，具現化を図る学習指導の在り方について研究したものである。

具体的には，年間指導計画を作成し，習得した文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識・技能を読みの視点に沿って活用し，学習課題の解決を目指す指導ができるようにした。また，読み比べたことについて話し合ったり書いたりする言語活動を展開する単元を構想し，検証授業を行った。

その結果，生徒が古典(古文)を読む際に課題を解決しようという意識をもって読むことができるようになった。

【担当所員の所見】

本研究は，高等学校国語科の「国語総合」における古典（古文）の学習指導の在り方について，年間指導計画を踏まえて単元の実践化を図ったものである。

今回の学習指導要領において，文語のきまりは「読むことの指導に即して行う」と明記されている。古典文法等を暗記させて現代語訳させることにとどまるのでは，古典（古文）を主体的に読んだことにはならない。そこで，どのように読むことの指導に即して行えばよいかということを明らかにしようとして，本研究は展開された。

実際には，１学期に『伊勢物語』を教材として「恋愛」というテーマで，２学期には『徒然草』を教材として「油断」というテーマで，それぞれの単元において，読み比べてものの見方，感じ方，考え方を豊かにする言語活動を通して読む能力を育成した。

今回の研究内容が，これからの実践において更に充実していき，主体的に古典（古文）を読む喜びを感じる高校生が増えることを願ってやまない。